

---

# ドラゴンレジェンド

縄雄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドラゴンレジェンド

### 【Nコード】

N8177D

### 【作者名】

縄雄

### 【あらすじ】

き力をもつ少年締羅。高校生として平凡な生活を過ごしていた彼は、ある出会いをきっかけに非日常な生活を送ることとなる。現実と異世界の行き来。その中で明らかになって行く龍の伝説。今、その伝説が幕を開ける。初めて書く小説なのでへたくそでセンスがあまりないかもしれませんが、がんばりますので読んでいただけたら非常に光栄です。誤字や脱字、筆記ミスなどありましたら遠慮なくお願いします。あと、感想なども参考にしたいのでいただければ嬉しいですm(・・)m

## プロローグ

青き空、青き大地。青き力に支えられている世界。どんな生き物であろつと、青の意味を知らないものはない・・・

ここは青の世界より離れた世界。いわば現実の世界に俺は来ていた。俺が青の力を持っていることをこの世界の者は1人たりとも知らない。そんな俺は高校生として、平凡な日常をすごしていた・・・

## 第一話 日常崩壊1

俺は天青<sup>てんせい</sup> 締羅<sup>ていら</sup>。高校1年の16歳だ。髪は濃い茶色で目は青色。成績はオール4とごく普通の生徒だ。

俺は今日もいつものように学校にいた。今は昼休み中だ。

「おい締羅、宿題やって来たか？」

こいつは原川<sup>はらかわ</sup> 達弘<sup>たつひろ</sup>。クラスメイトで髪は黒、目も同じだ。野球部に入っていてゲームや賭け事が好きだ。

「ああ、お前またやってないのか？」

「まあな。いつものことだろ？」

「たまには自分でやってこい」

「やる暇ないんだよ。部活もあるし。」

「つたくしょうがないな」

「へへ、すまねえな」

「ああ」

俺は宿題を渡した。実は次の授業が数学で、何故かよく宿題が出るのだ。

そしてときが経ち、放課後となった。部活に入っていない締羅はいつものように帰ろうとしていた。

「そんじゃ締羅、かえろうぜ」

「ん？お前部活はどうした？」

「今日は顧問が出張で休みなんだ」

「そうだったのか。なら帰るか」

こうして締羅達は学校を出た。

「でな、そのゲームがすげえおもしろーんだよ！」

ゲームが好きな達弘は学校を出て以来、ずっとゲームの話ばかりしていた。

「今度お前に貸してやってもいいぜ？」

「いや、遠慮する。俺はゲームはあまりしないからな」

「まあそう言うなって。お前にゲームの面白さってやつを教えてやる」

「いいや、断る」

「そんなに嫌なら無理には言わねえけどな」

「悪い、俺はあまりゲームに馴染めそうにない」

「いや、別にいいって。気にすんな」

「ああ」などいつものように締羅達は帰っていた。

コロコロ・・・

「ん？」

「やばい！急がねえと降りだすぞ！そんじゃあな！」

「ああ」

達弘は先に帰って行った。気づけば空は真っ黒な雨雲に覆われ、今にも降りだしそうだった。締羅は急いで走った。

しばらく走っていると、雨が一気に降りだした。

「くそっ」

家まではそう距離は無い。雨はさらに激しく降りだした。

もうひと息だ・・・とおもった瞬間。

ドガシャーン！！

締羅の走っていた道のすぐ隣の野原に真っ青な雷が落ちたのだ。そこから煙が立ち昇っていた。

締羅は何故かその場所が気になったので、見に行くことにした。彼

のその好奇心がある出会いのきっかけとなったのは、彼は知るはずもなかった・・・

## 第二話 日常崩壊2

締羅は雷の落ちた所についた。そこには深さ2メートルで直径3メートル程の大きな穴が開いていた。

「よほどすごい雷だったんだな」

締羅は穴を覗きこんだ。

「なっ！」

彼は絶句した。そこには見事な青色の鱗。そして輝く白銀の角と鋭い爪と翼を生やした生き物がいたのだ。その正体はまさしく龍だった。龍は全身に傷を負っており、意識が無かった。

何故龍が・・・とにかく家に入れよう。このことが世間に知られたら、とんでもないことになる。

普通の人ならあわててふためくところだろう。

締羅は冷静に対処できた。なぜなら彼は青の世界で実際に龍に会ったことがあったからだ。

締羅は穴に入り、龍を抱えようとしたが・・・

「くっ、重いな・・・」

なかなか抱えられなかったが、なんとか龍を担いで穴から出ることができた。



家が近くでよかった・・・

締羅は雷が落ちた所から家が近かったことに感謝した。彼は人気の無い道を通り、家にたどりついた。

締羅は既にずぶ濡れになっていたため、龍をリビングのソファに寝かせると、すぐに風呂の準備をした。

一つ言っておくが俺は一人暮らしだ。両親は俺が生まれた後、何処かへ姿を消したらしい。

俺は塗れた制服などをすべて脱衣室にある洗濯機に放り込んで着替えた後、龍のところへむかった。

龍は切り傷ややけどが多少ある以外は特に怪我したところはない。なかった。

「この程度の傷なら、俺の力で十分治せるな」

締羅は手のひらを龍に向け、精神を集中させた。すると、締羅の手から青い優しい光が出され、龍の体を包み込んだ。すると龍の体の傷がみるみる消え、完全に全ての傷を消した。

少し経つと龍の呼吸も落ち着き、安定したようだ。

締羅は風呂に入るついでに龍も一緒に入れ、汚れた体を洗ってやった。

風呂から上がると、時計は6時を回っていた。締羅はソファに龍

を寝かせると、夕食の準備に取り掛かった。

しばらくして夕食もでき、食べようとテーブルに向かおうとしたそのとき、眠っていた龍がむくりと体を起こした。どうやら意識が戻ったようだ。

「目が覚めたか・・・」

締羅は龍に近づいた。

締羅に気づいた龍は締羅に向かって翼を広げ、にらみつけてきた。

威嚇しているのか。警戒してるようだ・・・うかつには近づけんな。

そう思った締羅は足を止め、両手を挙げて言った。

「俺は何も持っていない。何もしない」

だが龍はいまだに威嚇している。

締羅は少しずつ龍に近づき、手を伸ばした。

龍は締羅の手が近くまで来ると、本当は怯えていたのか、ぎゅっと目を閉じた。

締羅は龍の頭に手を乗せると、優しくなでてやった。

すると龍はゆつくりと目を開け、不思議そうにじつと締羅を見つめてきた。

「な、何もしないと言っただろ？」

この龍は人の言葉が理解できるようで、うれしそうに一鳴きしていきなり締羅に飛び付いた。

「ぐわっ！お、重い・・・」

いきなりの不意打ちに締羅は、なすすべもなくまともに龍ののしかかりをくらってしまふのだった。

### 第三話 日常崩壊3

しかし・・・本当に龍がいたとは・・・青の世界でも、伝説の存在とされていたのに・・・青の世界はモンスターがいるからまだしも、その存在が全く無いこの世界に龍がいることがどうも腑に落ちない。龍に聞こうにも龍の方は言葉が理解できても話せないのなら意味がない・・・

そう思った締羅は龍をどかせ、夕食を食べることにした。すると龍は空腹を訴えて来たので、冷蔵庫にあった生肉やることにした・・・

「口に合えばいいんだが・・・」

締羅の心配は無用だったようで、龍は美味しそうに食べはじめた。

おそらく・・・何らかの異常現象によって空間がねじ曲げられ、たまたまそこにいたこの龍がそれに巻き込まれ、ここに飛ばされたのだろう・・・

どうして怪我をしているのかは分からないが・・・そういえば、青の世界と対になる赤の世界に龍が居ると聞いたことがある。多分そこから来たのだろう。

などと考えている内に、龍はあっという間にあげた生肉を全部食べ終わっており、空腹が満たされたのか、締羅に向かって頭を下げた・・・感謝しているようだった。

「腹いっぱいになったか？」

龍はこくと頷き、ソファに戻っていった。

俺も食べるか・・・

しばらくして締羅が夕食を食べ終わり、食器を洗って龍のところに戻ってくると、龍は疲れていたのか、気持ちよさそうに眠っていた。締羅はそこにあったバスタオルをかけようとしてふと思った。

この龍は子供なのか？龍にしては小さいな・・・

龍は頭から尻尾まで、3メートルはあった。締羅はバスタオルを龍にかけ、電気を消してリビングを出て、自分の部屋に向かった。自分の部屋に入った締羅は、すぐに寝ることにした。

今日はなんだか疲れたな・・・これからあのを龍どうすればいいんだ。当然家に置いておくが、いつまでもつか・・・

そう考えている内に、締羅は眠りに落ちていた・・・

「ん・・・朝か・・・」締羅は時計を見た。

「9時か。今日は土曜だったな・・・」

締羅は横を向いた。

「ん？これは・・・まさか!？」

嫌な予感がした締羅が向いた方には龍の尻尾のようなものがあつた。  
締羅は起きようとしたができなかった。

なんだ、この抱きつかれているような感覚は・・・

「はっ！」

締羅ははっとなり布団をはぐと、そこには締羅の体にしがみついて  
寝ている龍の姿があつた。

「うわあー！ー！！」

締羅は思わず声を上げた。

なんで俺のベッドに龍が居るんだ！？

龍は完全に安心しきって眠っている。

昨日会ったばかりなのに、よくここまでできるな・・・

締羅は龍を起こさないようにそつと龍の腕をどかし、ベットから這  
い出るとベッドを見た。今度は龍は枕にしがみついて寝ていた。

俺はこの龍に気に入られたのか・・・？

締羅は溜め息を付くと、部屋を後にして服を着替えて朝食を取るこ  
とにした。

今日は作る気にならないな・・・あれを飲もう。

締羅は手をひらき、集中する。すると締羅の手が光ったと思うとそこには栄養ドリンクのような物があつた。締羅はそれを一気に飲んだ。

これは一日に必要なエネルギーを全て取れる栄養薬だ。もうこれで今日はなにも食べなくても大丈夫だ。

締羅が部屋に戻ろうとすると、龍が眠たそうな顔をしてリビングに入ってきた。

「ぐっすり眠れたか？」

龍は嬉しそうに頷いた。

「さて、暇だし宿題やつくか」

締羅は龍に食事を与えた後、宿題をすることにした。

「・・・」

じー

「・・・」

じー

「・・・」

じー

ああ、もうなんなんだ！！さっきから俺のことばかり見て！まるで集中出来ないじゃないか！

実はさっきから龍は、宿題をしている締羅をずっと見つめっぱなしなのだ。

もういい、また後でやろう。

俺が龍の方を向くと、龍と目が合った。すると龍は上目遣いに俺を見つめてきた。どうやら甘えたがっている様だった。

遊んでやるか。と思った瞬間。家のチャイムがなったのだ

ピンポン・・・

締羅はその場に凍りついた・・・



#### 第四話 日常崩壊4

ピンポン・・・

「締羅ー、遊ぼうぜー？」

なんと来ていたのは達弘だった。

「・・・・・・・・」

まずい・・・今達弘を家に入れたらとんでないことになる・・・

「おい、締羅ー。いるのかー？」

「いいか？ここでおとなしくしてるんだぞ」

俺は龍にリビングで待っているようにと言った。龍は小さく頷いた。

「いま出る」

締羅は玄関のドアを開けた。

「よっ締羅。遊ばないか？」

「いや、今日は家でゆつくりしたいから遊ばない」

当然俺は断った。簡単な言い訳を言って。

「じゃあお前の家で遊ぼうぜ？それだったらお前が家から出ることなく遊べるじゃないか」

「いや、今日はどうしても1人でいたいんだ。だから、すまん」

「わかった。じゃあ明日はいいだろ？」

「どうかな？」

「あ？なんだよそれ」

「そのときの気分で考える。だから分からないな」

「わかった遊べることを祈ってるぜ」

そう言っただけは帰って行った。

俺は祈っても無いがな・・・

締羅は明日は達弘が来ないことを祈り、家に戻った。

「すまん、ありがとな」

龍は締羅の言われたとおりにおとなしく待っていた。

「散歩にでも連れて行ってやれたいんだがな。無理があるよな。」

しかしこのままでは龍がかわいそうだ。ずっと家のなかに入れておくわけにもいかないし、龍も嫌になるに違いない。

「はあ、人間の姿にでも変わってくれば、こんなこと考えずにすむのにな」

そんなことをぼやいていると、龍が締羅の肩を叩いた。

「ん？どうした」

締羅は龍の方を向いた。龍はとても締羅に甘えたいようで、今にも飛びついて来そうだった。

「ちょ、ちょっとまってくれ・・・」

龍はもう我慢できなとばかり思いきり締羅に飛びついた。

「ぐわあ！は、離れろって！」

そんな締羅の言葉を龍は無視して、今度は嬉そうに締羅の顔を舐め始める。

「や、やめろって！くすぐったいからやめてくれ！それに重い・・・」

締羅はなんとか龍を押しのとくと、ぐつたりとソファに座った。そして龍のよだれまみれになった顔を拭いた。

はあ、全く何でそんなに俺になついてるんだ？

俺は溜め息を付いた・・・

「このままだと、俺がもたないな・・・」

締羅は部屋に戻って宿題のつづきをすることにした。当然、龍も付いてきたが。

「よし、これで全部終わりだな。龍の視線が気になったが」

締羅は龍の視線を受けながらも、宿題を終わらせた。

「もう昼になるのか。俺は何も食べなくていいが、龍に何かあげないとな」龍に食事をやるとあったいう間に食べ終わり、ソファー昼寝をはじめた。

俺も久しぶりに昼寝するか・・・

締羅は龍の隣に座った。すると龍が締羅の膝に頭を預けてきた。締羅はその頭をしばらく撫でてやった後、眠りに落ちた。締羅が目覚ますと、時計はもう5時を差していた。

「ん・・・もうこんな時間なのか」

しかしかなり眠っていたようだ・・・久しぶりだったからな。こうやって昼寝をしたのは。3月にしては、今日は暖かったな。

買い物に行かないと・・・

「いいか？家でちゃんと留守番してるんだぞ？」

龍は置いて行かないでと言わんばかりに激しく首を横に振った。

「じゃあこうしよう。帰った後、たくさん遊んでやるからな。それでどうだ?」

あっさりと龍は嬉しそうに頷いた。

「すぐに帰って来るからな」

そして家を出た締羅は急いで店まで行き、さっさと必要な物を買ってすぐに家に向かった。

はあ・・・何故かあの龍からは目を離せないんだよな。ちゃんと俺の言うとおりにしてしてくれてるんだが・・・何か不安で仕方がないんだよな。

そんなことを考えながら締羅は家につくと、ふと立ち止まった。

何か嫌な予感がする・・・まあ気のせいだろう。

そう判断した俺が甘かった。ドアを開けると、龍が飛びかかってきた。当然俺はそのまま張り倒された。早く遊んでほしいみたいだ。

「ま、まで。荷物を置いてからな。」

それから俺は龍に夕食をやって遊んでやった。そのときの龍はとても幸せそうに見えた。

「さて、そろそろ風呂入るか・・・」

時計は9時を差していた。

締羅は風呂場に向かっているときにふとあることに気づいた。龍が後ろからついてきているのだ。「もしかして、一緒に入りたいのか？」

締羅の言葉に龍は何度も頷いた。よほど一緒に入りたいううだ。

「しかたないな、一緒に入ってやる」

しかたなく締羅は龍も一緒に入れることにした。

・・・龍と風呂だなんて、妙な気分だ。

締羅は今、龍とともに入浴中なのだが、妙な違和感を感じていた。

まあこういうのも悪くはないか・・・

風呂から上がった締羅は、すぐに寝ることにした。が、また龍がついて来ているのだ。

「ま、まさか俺と寝るつもりか？」

龍は当然とばかりに頷いた。

どこまでこいつは俺と一緒に居たいんだ？

締羅はもう断つても無駄だと思い、龍と寝ることにした。何故か締羅は龍が居るといふのに、あっさり眠りにつくことができた。

そして、締羅がこの龍が人間に姿を変えたりさえできればという願いが、後になうこととなる・・・

## 第五話 日常崩壊5

現在、日曜の朝4時頃。締羅はふと目を覚ますと、トイレに行こうと起き上がった。ところが思いがけないようなことがあった

「な、なんだとー！ー！」

なんと締羅の横には龍の姿は無く、かわりに少女が眠っていたのだ。しかも締羅の腕にしがみついて。

その少女は、膝あたり程までもある龍の鱗とそっくりの色の青い髪、翼のようにとがった耳。年齢は13、14ぐらいだ。寝ているので目の色は分からないが、整った顔をしていた。そして、ふさふさの鱗と同じ色の毛に覆われた尻尾があった。美少女と言えた。いや、可愛いも当てはまるだろう。

可愛い子だな。でも、俺は絶対に女の子なんて家には入れてないぞ！ちゃんと鍵も掛けたし、入って来れるはずが無い！そういえば、龍の姿が見あたらないな・・・

俺はまだ変な夢を見ているんだ。次に目を覚ましたときには、もうこの子もいない・・・

締羅はそう考え再び眠りについた。どうやら彼は、このことを夢だと思い込んでいるようだ。

そして朝9時を過ぎた頃、締羅は目を覚ました。が、横を向くと、4時頃に見た時と同じ後景があった少女が寝ているのだ。「ゆ・・・



夢じゃ・・・なかったのか・・・」

締羅は啞然としたが、落ち着いて考えるためベッドから出ることにした。ちょうど今、少女が離れているので出るには絶好のチャンスだった。締羅はベッドから出ると、部屋を出てリビングに向かった。

「なぜだ・・・どうなっているんだ・・・」

締羅は先ほどからソファーに座り、考えこんでいた。

「なんで女の子が・・・しかも俺のベッドに。俺は昨日龍と寝たはず・・・そういえば、龍は何処いった？」

締羅は家中探したが、龍の姿は見つからなかった。

「あの子に聞いてみるか・・・何か知っているかもしれない」締羅はふと部屋の前で止まった。

なんか入りづらいな・・・

女の子が部屋の中で寝ているので、締羅は戸惑った。

ここは俺の部屋なんだ部屋の主が入れないでどうする。

締羅はドアをあけ、部屋に入った。少女はまだベッドで寝ていた。締羅は少女に近づいた。

「おい、起きて。起きてくれ」

起きる様子が無かったので締羅は少女の体をゆすった。

「頼む、起きてくれ」

「うっくん」

少女は目を開けた。やっと起きたようだ。その目は締羅と同じ透き通った青色だった。

「ふにゅ？朝？」

少女は可愛らしい声を出して起き上がった。

「やっと起きたんだな。で、いきなりだが何で俺のベッドにいるんだ？」

「え？私は昨日ご主人様と一緒に寝ましたが・・・」

「はあ？」

ご主人様？いったい何を言っているんだ？この子は・・・

「なあ、ここに龍はいなかったか？信じるわけないが、いたんだ」

「龍ですか？」

「ああ、そうだ。見てないか？」

「えっと、あの、その龍ってこの姿ではありませんか？」

少女はそついうと目をつぶった。すると、青い光に包まれた。

この光は・・・青の光・・・

光が消えると、そこには見覚えのある龍の姿があつた。

「ま・・・まさか・・・君は青の世界で伝説と言われている龍人なのか？」

「はい、そうです」

「ふつ、まさか実在するとはな・・・これは驚きだな・・・」

「私達は伝説とされているんですか？」

「ああ。絶滅したとも言われているし、存在しないとも言われた存在だ」

「ご主人様は私のことを疑っていらつしゃいますか？」

「いや、真実を見たからには、信じるしかないしな」

「あの、ご主人様は私を殺そうとは思っていらつしゃらないですよね？」

「当然だ。殺すなんてことはしない。それよりなんでご主人様なんだ？」

「はい、それはご主人様が怪我を負ってて私を助けてくださり、それに優しく接してくださったり、食べ物も下さいました。こんな人に、私は会ったことがありますでした。だから私は、ご主人様が主であってほしいと思い、そう呼んでいるんです」

「そうなのか。そのご主人様というのはなんとかならないのか？」

「いいえ。私はそう呼ぶと決めましたので、ずっとそうご主人様のことを呼んでいくつもりです」

「そ、そうか。それでいつまでここにいるんだ？」

「ずっとですよ、ご主人様。ずっと一緒にいます。これからも、よろしく願います」

「え？・・・あ・・・はあ、これからどうなるんだ・・・」

この瞬間、締羅の平凡な日常は崩れ去ったのであった・・・

## 第六話 学校の騒動1

次の日の月曜の朝

「ん．．．もう朝か．．．」

締羅は起き上がると、背伸びしてリビングに向かった。

「そっいや、あの子の名前聞いてなかったな。あとで聞くか」

少女はまだ寝ている。当然締羅のベッドで。

「寝所つくつてやらないとな．．．」

締羅は朝食をつくり、食べ終わる頃に少女が起きてきた。

「あ、おはようございます」

「ああ、おはよう。朝食そこにあるからな」

「はい、わざわざすみませんご主人様」

「気にするな。それよりご主人様はどうにかならないか？」

「では締羅様ではだめですか？」

このほうがましだろう。少なくともご主人様よりは。

「ああ、それでいい。ん？なんで俺の名前を？」

「この前誰かが来たときに締羅様の名前を言っていたようなので、それで・・・」

「ああ、達弘が来たんだったな。ところで君の名前は？」

「私はティオといいます」

「よろしくな、ティオ」

「はい、締羅様」

「じゃあ行ってくる」

「え？何処へですか？」

「学校だ。当然だろ？」

「学校・・・ですか？」

「そうか、ティオは学校を知らないんだな。」

「まあ今度教えてやる。留守番頼んだぞ」

「わ、私も行きます！」

「だ、だめだだめだ！ここにいろ」

「うー」

「いいか、ついて来たりするんじゃないぞ？」

「……うー」

「わかったな？じゃあ行ってくる」

締羅はこうして家を出た。

とんでもない、ティオを学校なんか連れて行ったらまずいことになる。しかも尻尾生えてるし。連れて行けるわけないじゃないか。

「よう、締羅。おはよう」

「ああ、おはよう」

「今日はいい天気だな。なんかこんな天気は久しぶりな気がするな」

「そうだな」

そういえばこんな晴天は久しぶりだった。ここのところ雨が何日も続いていたのだから。

「あ、締羅君おはよー」

「ああ」

教室に入った途端声を掛けられた。彼女は花宮 鈴華（はなみや りんか）。中学校から一緒だ。

ここは安らげるばしよだな・・・

締羅はふとそう思った。無理もない。家にはこの世界ではありえない存在があるからだ。

今日の最初の授業は社会だった。いつも通り授業を受けていたが、なぜか締羅は妙な胸騒ぎを感じていた。

なにかまずいことが起こりそうな気がする・・・気のせいだ。何も起こりはしない・・・

そう思いながら窓の外を眺めていると、大きな影が横切っていくのが見えたが、よくとらえられなかった。

ん・・・・・・？

締羅はこのとき嫌な予感がした。その予感は当たることとなる・・・



## 第七話 学校の騒動2

その影の正体はなんとティオだったのだ。無論、龍の姿だが。

ここに締羅様がいるはず・・・

ティオは学校の屋上に降りると人間の姿になり、校内に入った。

締羅様、何処にいらっしゃるでしょう・・・

学校に入ったのはいいが、締羅の居場所が分からなかったのだ。ちなみに締羅は1年B組で、一学年A～Dまでクラスがある。

だがティオは偶然今、1年の廊下を彷徨っているのだ。

そして休み時間に入った。締羅はトイレに行こうと教室を出た瞬間だった。

「なっ・・・！」

「あ、締羅様！」

なんと締羅はばったりとティオと会ったのだ。

な、何故ここに・・・幻覚を見てるのか？俺は・・・

「な、何故ここに・・・」

「だって締羅様とどうしても一緒にいたくて・・・」

「そ・・・そうなのか・・・」

「会いたかったです！」

するとティオがいきなり締羅に抱きついたのだ。

「お、おい・・・」

ぐ・・・なんだ、この突き刺さるような視線は・・・

締羅は今注目の的になっていた。

と・・・とりあえず場所を移すか・・・

締羅はティオを抱き上げ、教室を飛び出そうとしたが・・・

「誰なんだ？その子」

達弘が顔を真つ赤にして聞いてきた。

「そ・・・その、この子は・・・」

「締羅様は私のご主人様です」

「なっ！ティ、ティオ！」

「て・・・締羅・・・そうなのか？」

「こ、この子は親戚の子供で、この前両親が仕事で海外へ行っただか

ら、家で預かってるんだ」

「締羅は一人暮らしだろ？だったらその子と二人きりで生活してるのか？」

鼻息を荒らしながら聞いてきた。

「そ、そうだが」

「うおー！締羅！！」

「っ！！」

すると達弘がいきなり締羅に掴みかかった。

「ずるいぞ締羅！こんな可愛い女の子と一緒に生活してるとは！」

「そ、そう言われても・・・」

締羅が気づくと、教室やその周りに、締羅のクラス以外の生徒も集まっていたのだ。

この状況、酷くまずいな。とにかくここを脱出しなければ・・・

締羅はティオを抱きかかえると生徒を押しつけ、教室を出ると一気に駆け出した。

後ろからは生徒達が追って来ていた。

締羅は屋上に出ると、ティオを下ろした。

「いいか、何があってもここには来るんじゃない。すぐに帰るから。いいな？」

「でも・・・」

「時間がない・・・大丈夫。必ず帰るから」

「スフィアゲート」

そう言うのと締羅は手に神経を集中させた。するとティオが青い光に包まれたかと思うと、次の瞬間姿を消していた。締羅は転送の術を使い、ティオを家まで送り飛ばしたのだ。

「よし、これで大丈夫だ」

そして締羅は中へと戻った。

「あ、見つけたぞー！」

男子達がいつせいに駆け寄ってきた。

「あの子はどこだ？」

「家に帰した」

「な、なに〜！いつの間に！」

「とにかく、教室に戻るぞ」

こうして締羅達は教室へ戻った。その後締羅は普通通り授業を受けていたのだが、周りの生徒達は締羅のことばかり見ていた。しかもすさまじく痛い視線で。締羅は男子の視線より、女子の視線のほうがより多く痛く感じた。

なんか全然集中できなかったな今日は。とつとと帰るか。

「締羅君！」

教室を出ようとした締羅はいきなり呼び止められた。

「ん？なんだ」

「あの・・・その・・・」

「？」

声を掛けてきたのはあまり話したことのない女子だった。

「その・・・締羅君はあの子とどういう関係なの？」

「ティオは俺の親戚のようなものだ」

「そ、そうなの・・・わかったわ。ありがとう」

「ああ」

そして締羅は学校を出た

まさか学校でこの力を使うとはな・・・すべてティオが原因だが。まさか学校について来るとは思ってもなかったな。おかげで嫌な視線で見られたし・・・

締羅は家につき、ドアをあけた。その瞬間。

「締羅様ー！」

「ぐわっ！」

ティオがいきなり飛びついてきたのだ。

「よかったです。帰ってきてくれて」

「必ず帰るって言ったろ？」

「はい。うれしいです」

「とりあえずどこうな」

締羅はティオをどかせると着替え、夕食の準備に移った。

「今日はなんですか？」

「今日はカレーだ。知ってるか？」

「うーん分らないです」

「まあ後で教えるから」

一つ言っておくが、俺が料理を作っているわけではない。この世界に住み始める2ヶ月程前、締羅の出したこの世界に来るための異次元空間が誤作動を起こし、2500年に締羅を飛ばしてしまったのだ。そこで締羅は食べ物と自在に作れる装置を手に入れ、そのまま持ち帰り、この世界に持ってきたのだ。この装置は水さえあればなんでも食べ物と製造が可能だ。

夕食を終えた俺はソファーにばったりと倒れこんだ。その隣にテイオが座った。

「はあ、何か大変な一日だったな」

「学校って人がたくさんいましたね」

「まあな」

そう言っていると締羅は体を起こした。

「なあ」

「はい？」

「テイオはまた龍の姿に戻れるんだろ？」

「はい、そうですが」

「じゃあ龍の姿でいてくれないか？」

「どうしてですか？」

「そのほうが何故か落ち着く」

「分かりました」

するとティオが青白く光り始めた。その光は人間の形から龍の形に変わると、ふっと消えた。

「こんなふうに変身するんだな」

龍の姿のティオは頷いた。

「はい」

「ん？、誰かの声が・・・」

「私ですよ。締羅様。」

「テレパシーか」

「少し違いますけど、そのようなものです。」

「ほう、なるほどな。一応俺もテレパシーの力は持ってるんだがな」

「そうなんですか？」

「ああ。ほら、できるだろ？」

締羅はテレパシーを使ってみせた。



「あの、締羅様。」

「ん？」

「今日も一緒に寝てもいいですか？」

「その姿だったらかまわない」

「え・・・あの、人の姿で寝たいんですが・・・」

「駄目だ、そんなことすると俺の理性がもたない」

「え？」

「あ、いやなんでも。とにかくその姿だったら一緒に寝てもいい」

「うゝ、わかりました。」

「ああそうだった。風呂のときもだぞ」

「ええ？」

「だから理性がもたない。だから頼む・・・」

「はい」

「まあたまには人間の姿でも寝ていいから、そう気を落とすな」

「あ、ありがとうございます」

「さ、早く風呂に入って寝よう」

「はい」

そういえばティオを洗ってやるというのは、女の子を洗ってやることになるのか？いや、龍の姿だったらなんの関係も持たないし、別にかまわないか。

そうして風呂を上がった締羅とティオは、締羅の部屋へ向かった。

締羅はベッドに入ると、ティオを隣に入れた。

「おやすみなさいませ、締羅様」

「ああ、おやすみ」

こうして二人？は眠りについた。

こうして学校の騒動は幕を閉じたのだった。



## 第八話 買い物へ

現在、俺とティオ（龍）は布団で寝ているのだが。

「締羅様」

「ん？」

「狭くないですか？」

「少し狭いが大丈夫だ。気にしないでいいぞ」

「あ、はい。ありがとうございます」

俺の寝ているベッドは元々二人用だったから一人のときは思いっきり手足を伸ばして寝れる大きさだ。

ピカッ！ゴロゴロ・・・

「ん？、降り出しそうだな。ここの所雨が続いてるな」

「こ、怖いです！」

「雷、怖いのか？」

「はい、これだけは苦手で・・・でも、締羅様がいるから平気です」

ピカッ！・・・ゴロゴロゴロゴロ！！

「ひゃあ！」

ティオは締羅にしがみついた。

「大丈夫だ、怖くない」

「うっう」

「おやすみ、ティオ」

次の日の朝

今日は久々の晴天となっていた。

「う・・・ん・・・」

締羅は目を開けると、そこには締羅に抱きついて寝ているティオ（人）がいた。

「う、うおあ！」

全く、心臓に悪いじゃないか。はあ、学校の奴らどう思うだろうな。俺がこんな可愛い子と一緒に風呂に入ったり寝たりしていることを知ったら・・・い、いや、何を考えているんだ俺は！だが、このことを知られると間違いなくとんでもないことになるだろう・・・

「今日は晴天だな。なんか久しぶりだな」

今日は土曜で何もすることがなかった。

「う．．．ん．．．締羅．．．様．．．」

ティオはどうやら俺の夢を見ているようだ。

ティオは本当に可愛いな。思わず見とれてしまう。こんな子が俺をご主人様になっているのを学校の奴らが知ったら、殺されるだろうな。勘違いしないでほしいが、俺は襲うなんてことは一切するつもりは無い．．．．

「うにゅ．．．あ、おはようございます」

「あ、ああおはよう」

だあゝ！なに見とれているんだ俺は！

「？、どうかしました？」

「ああ、い、いやなんでも」

「そうですか」

「それより何故巫女の服装なんだ？」

「これは私が最初に着ていた服ですから」

「そうか」

そして締羅とティオは朝食を終えると、ソファーでくつろいだ。

「暇だな・・・買い物でも行こうか？今日は祝日で学校は休みだからな」

「あのっ私も」

「そうだな、いつまでも家に閉じ込めてても可哀相だからな」

「え、いいんですか!？」

「ああ、でもその尻尾はなんとかならないか？あと服装も」

「え、あの、私このほかに着るものは持ってないんです」

「な、なにに!」

「このまま出歩かせるのも無理だし・・・あ、そういえば」

締羅は物置部屋へ行き、一個のダンボールを取り出した

「これは俺が中学生のときに着ていた服だ。これから着れる物を探そう」

それから数分後・・・

「ちょっと無理があつたか？」

ティオは締羅の服着たのだが・・・

「私はこれでもかまいません」

「そ、そうか・・・なら行くか」

「はい」

そして締羅達はデパートにやって来たのだが・・・

女の子の服ってどう選べばいいんだ・・・ティオにはどんな服が似合うんだ？

「なあ、ティオ」

「なんですか？」

「服、自分でいいの選べるか？」

「あ、はい、だいじょうぶです」

「俺、女の子の服ってどう選べばいいかわからないからさ。好きな  
の選んでいいから任せるぞ。俺はそこにいるから」

「はい、分かりました」

それから数分後・・・



「おまたせしました」

「ああ、行こうか」

さて、ティオの服はそろった。もう帰るとしよう。長居は無用だ。

「さあ、もう帰るぞ」

「え、もうですか」

「ああ」

ここで学校の奴らなんかに見つかってみろ、ややこしくなるに違いない。

「わかりました」

そして家に帰り着いた二人は昼食をとった

「締羅様」

ソファでくつろいでいた締羅にティオは話かけた

「ん？」

「ちょっとお話が・・・」

「話？」

「はい、大切な話です」

## 第九話 契約1

「話？何の話だ？」

「じつは、契約についてなんですが・・・」

「契約？」

「はい、あなたと私の契約です。契約をすれば、締羅様は私の力を使うことができます」

「その力を使って何かするの？」

「はい、締羅様に私の力を捧げようと思います。助けてもらった恩です」

「いや、俺にはもう力はあるから・・・」

「でも、これでは私の気が済まないんです。お願いです」

「龍の力を得るといふのはどんな風なんだ？」

「わたしと締羅様がひとつとなり、龍神の力をあやつることができます」

「龍の力が・・・また元の姿に戻るのか？」

「はい、もちろんです」

やってみるか・・・

「よし、なら契約しよう」

「ありがとうございます！あ、一つ言っておかなければならないことがあります」

「何だ？」

「契約した後の私は、今の私であってそうで無くなります」

「どういう意味だ？」

「つまり、人が変わると言うことです。では、いきますよ。私の手を握ってください」

締羅は言われるがままにティオの手を握った。するとティオは呪文のようなものを唱え始めた。

「二つの身と心を一つとし、今ここに契り結ばん！！」

その瞬間締羅とティオの体がまぶしくひかり始め、光りの球体となり二つの光の球体が浮かび上がり、やがて一つに合わさった。

光が消えると、締羅の姿は変わっていた。

背中に大きな龍の翼が生え、手には背丈以上もある巨大な剣が握られていた。その剣は驚くほど軽く、まるでそこらへんに落ちている木の枝を持っているような感覚だった。

体は頑丈で、しかも軽い胴防具、籠手、具足に覆われ、青黒く光っていた。

すごい・・・これが龍の力か・・・

「そろそろ元に戻りたいんだが・・・」

「・・・分かりました、締羅様」

締羅の体が光を放ち、光が消えた頃には締羅は元の姿に戻っていた。そして締羅の目の前に一人の少女がいた・・・

「・・・・・・」

なんだこの子は？なんかティオに似てるが・・・

少女は青く光る膝程の長さの髪に、頭には紋章のようなものが刻まれた黒いリボンをつけており、目は締羅と同じ青色で黒いローブを身にまとっていた。

「君・・・誰？」

「・・・ティオですよ」

「なに！？まさかそんなこと・・・はっ、まさか・・・」

締羅は契約する前のティオに言われたことを思い出した。

ティオがティオでなくなるというのはこのことだったのか・・・すこし大きくなったようにも見えるが、15、16歳くらいだろうか？

「で、これからどうするんだ？」

「・・・私と締羅様は契約をしました・・・この契約は締羅様が死ぬまで無くなることはありません・・・」

「な、なにい！？」

じゃあずつとティオは俺が死ぬまで引つ付いているということか！？なんて無茶のある契約をしてくれたんだ！

「なあ、取り消しとかはできないのか？」

「・・・いいえ、それはできません」

「そうか・・・」

なんかとてもおとなしい子だな・・・喋り方もそうだし、前のティオとは全然違う・・・なんかさらに可愛くなったというかなんというか・・・そんなことはどうでもいいが・・・

はあ、なんかこの子に様呼ばわりされると、もう理性が持たない気がするってならない・・・

「なあ、頼むから様はつけないでほしいんだが・・・あと敬語もやめて、普通に接してくれよ」

「・・・でも、それだと締羅様が・・・」

「俺がいいと言っているんだからそれでいいだろ？」

「わかりました、でも様だけは・・・」

「ああ、わかった」

なんで様なんだ？

「あの」

「ん？」

「そろそろ寝ても・・・いい？」

締羅は時計を見た。針はまだ3時を差している。

「昼寝か？」

「うん、疲れたから・・・」

「疲れた？」

「・・・結身レザクトすると、体力を使うから・・・」

「そうなのか」

「締羅様も・・・一緒に寝ない？」

「ええ！？それは・・・そのだな・・・」

絶対無理だ！前のティオだったらまだしも今のティオはさすがに・

「私と寝るの・・・嫌？」

「そ、そんなことはないが、その・・・まだ眠くないから」

「・・・わかった・・・でも、そばにいて・・・」

「どうしてだ？」

「締羅様といると落ち着くから・・・」

「そうか・・・おやすみ」

締羅はこの時、ひどく後悔していた。契約なんかするんじゃないかなかったと・・・





## 第十話 契約2（前書き）

m すみません、ネットの接続の調子が悪くて更新遅れました m（――）

## 第十話 契約2

・ テイオは眠ったか・・・まったく、契約などしなければよかった・

外にでもいこうか・・・だが傍にいてといわれているし、起こす訳にもいかない。

その瞬間、締羅に頭痛が襲い掛かった。

「うつ・・・！」

なんだこの頭痛は！？ん？手が光っている・・・まさか・・・そろそろなのか。

「やっとおさまったか・・・」

俺も寝ようか。

そして締羅も眠りについた・・・

数時間後・・・

「ふう、よく寝たな」

時計はもう6時を差していた。

「あ、起きたんですね」

「ああ・・・って龍の姿か・・・いつの間に」

「ついさっきです」

「そうか・・・って話し方変わってないか？」

「この方がやっぱり話しやすいです。」

「じゃあ別にそれでもいいよ」

「それより締羅様」

「ん？」

「あの・・・その・・・」

ティオは顔を赤くしていた。

「なんだ、どうした？」

龍が赤面するのははじめて見た・・・

「甘えてもいいですか？」

「え？ああ、別にいいが」

いや、までよ・・・なんか前より大きくなっているような・・・

ティオは4、5メートル程になっていた。

「い、いや、やっぱり・・・」

「締羅様あ!!」

「なっ!!」

もう遅かった。締羅はティオののしかかりをまともに受けた。しかも前よりも強力なのを・・・

締羅は思い切り頭をぶつけ、そのまま気絶した。

ここは・・・

「締羅よ・・・」

「あ、あなたは青帝せいだい・・・」

そこには神官の服を纏った男がいた

「いかにも・・・しばらくだな」

「はい、青赤界終末戦ブレードル以来ですね」

「そうだな、一つ話しておくことがある・・・」

「はい・・・」

「お前は龍とともにいるな？」

「そうですが」

「その龍を守ってやるのだ。他の者にはけして渡してはならない。お前の守るべき存在だ。」

「はい」

「ところでお前も気づいていると思うが、そろそろのようだな」

「やっとですね。この3年長かった気がします」

「お前にとってはそうだろう・・・もうひとがんばりだ、しっかりな。だが力を封じて1年だがな。」

「ありがとうございます」

「うむ。お前は我が青き力を継ぐ者だ。そのことを誇りに思う・・・さあ行け、青き戦士よ・・・」

そして締羅の視界は真っ白になった・・・

「う．．．ここは．．．」

「あ、気が付きました？」

「ああ、大丈夫だ」

「よかったです」

「もっと加減してくれよ？」

「はい、ごめんなさい」

「わかってくれればいい」

それにしても、さっきのは偶然見た幻覚なのか？それとも夢？

と、そのとき

ぐ

「ん？」

テイオは顔を真っ赤にしていた

「あの．．．お腹すきました」

「そうだな、今夜は外に食べにいくのか」

「はい！うれしいです！」

「姿はちゃんと変えるんだぞ？」

「わかってます！」

うれしそうだな。まあ、こういうのは初めてなんだろうな。

こうして二人はレストランへ向かった。



## 第十一話 危険な夜街

二人は人々で賑わう中心街へやってきたのだが・・・

「うわぁ、たくさん人がいますね」

「まあな、東京だし」

言い忘れていたが、俺は東京住みだ。

「それより、あまり引つ付くな。なんか誤解されるようだから」

突き刺さるような視線が容赦なく二人に襲い掛かる。締羅とティオはかなり目立っていた。特にティオは。ティオを見て顔を真っ赤にする男性達。中には鼻血を吹き出して倒れる者もいる。それとは逆に締羅をみて顔を赤くする女性もいた。大半が女子だが。ティオを睨み付けているのもいる。

「なんかさっきから見られてるような気がします」

「俺もだ。視線が痛い。だから少し間を空けよう」

「はい」

それからしばらく歩いていると・・・

「あの」

「ん？」

「トイレに行きたいんですが・・・」

「ああ、そうか。じゃあ近くに公園があったはずだからその公衆便所に行こう」

「はい」

そして二人は公園の入り口についた

「俺はここで待っている。行ってこい」

「はい、すぐもどります」

「ああ」

ティオは急いでトイレへ向かった。そしてしばらくたつた。

ふう、早く締羅様の所へいかないと・・・

用を足したティオは急いで締羅の所に戻ろうとトイレからでた瞬間だった

「きゃ!？」

何かにぶつかった。その衝撃でティオは後ろに転んだ

「ん？なんだ？」

なんとぶつかった主は不良だったのだ

「か、かわいいいいい！！」

不良は顔を真っ赤にして飛び上がった

「おい！きてみるよ！」

「なんだよ・・・おおお！」

「どこから来たんだ？こいつ！？」

後から2人の不良が現れた

「あ、あの・・・通してくれませんか？」

「駄目だ。お前のような可愛子ちゃんには滅多に会えないからな。たっぷり楽しませてもらうぜ・・・へへへ・・・おい！おさえろ！」

「「おう！」「」

ティオは二人の不良に押さえられ、身動きがとれない状態となった。

「や、やめてください」

そのころ公園の入り口では

「遅いな・・・腹でもこわしたか？」

締羅はトイレの方へ向かった。そこで思いもよらない後景に出会った

「おい！騒ぐんじゃない！」

押さえつけている不良に一人がティオの口を押さえる

「へへ・・・始めるか・・・」

不良はティオの服をつかむと、引き剥がそうと引っ張った

「ん！んぐぐ・・・んぐ」

ティオは声をあげようとしたが口を押さえられて声がだせない

「な、ティオ！なんて奴等だ」

締羅は近くに落ちていた身長ほどもある手ごろな長い木の枝を取ると、ティオに襲い掛かろうとしている不良の真後ろまで一気に走りこんだ

不良はそのことにまだ気づいてなかった

締羅は木の枝を空高く放り投げた。それは不良の真上に位置すると

ころだ。締羅もそれを追いかけるように飛び上がった。そして木の枝を空中で掴み、そのまま一回転すると、不良のいる真下へ急降下した。

バキィ！

「ぐほああ！」

枝が折れる音と共に不良の叫び声があがった。

「ってー！な！！なんだよ！！！」

「ティオにこれ以上手を出すと許さないぞ！」

「ほお、やるってのか？おい！やるぞ！」

「「おう！」」

不良達は締羅を取り囲んだ

「俺の邪魔をしたことを後悔するがいいぜ！うらあ！！！」

不良達は一斉に締羅に向かって走りだした

先にかかってきた不良の攻撃をひらりとかわし、蹴りを入れる。

「うぐあっ！」

蹴られた不良は5メートル以上は吹き飛ばされていた

「う、こいつ・・・克之を一撃で・・・」

克之とはおそらく今吹き飛ばしたリーダーのようだ  
かつゆき

「こうなりやけだ！くらえー！」

残りの2人の不良が同時にかかってきた

締羅はそれをかわし、先ほど真つ二つに折れた2本の枝を拾った

「そんなもんつかったっていみねーよ！」

「あるさ」

締羅はかかってくる2人に向かって斬りかかった。その速さは人間ではとらえられない程だった。

ドオン！

大きな音がしたと思ったときには二人の体は中に浮いていた。そしてそのまま吹き飛んでいった

「まだやるか？」

「くつ、おぼえてろよ！おい！ずらかるぞ！」

「「あ、まてよー！」「」

そして不良達はどこかへ退散していった

「ティオ、無事だったか？何かされてないか？」

「はい、大丈夫です」

「無事でなによりだ」

「ありがとうございます。おかげで助かりました」

「ああ、いや、ティオが無事で安心したよ。さ、行こうか」

「はい！」

こうして二人は公園を出た。

あまりティオを一人にしないほうがいいな。今回のようなことはめんだ。俺がしっかり守らないとな。

そんなことを考えていると、ティオが締羅の腕にすがりついてきた。

「ん？どうかしたのか」

「さっきみたいなのがあつたから、怖くなって」

「ああ、そうか。はぐれるなよ」

「はい」

「何が食べたい？」

「そうですね・・・おいしく焼けた肉がいいです」

肉か。さすがは龍だけのことはある。肉好きなんだな・・・

「焼肉か、向こう側にちょうど見える。そこにしよう」

店について食事をはじめたのだが

「締羅様」

「ん？」

「この辺りには龍の姿が見当たらないんですが」

「ああ、ここはお前の住んでいる世界と違うからな」

「へえ、そうなんですか」

「ああ、まあ詳しくは帰って話そう」

「わかりました」

しばらくして食事も住んだ二人は会計を済ませ、店を出ようとしたその瞬間だった。



「お、締羅じゃないか・・・ってその子はもしかしてこの前の！とは少し違っけど可愛いー！！」

「た、達弘・・・」

「まずい！ともかくこの場から離脱しないと」

「いくぞ！ティオ！！」

締羅はティオの手を取って走り出した

「あ、こら！まてー！！！！」

「追ってくると思っていたよ全く。今は逃げるしかない」

「逃さんぞ締羅あー！！！！」

振り向くと達弘が物凄い速さで迫ってきた。

「このことは今度話す！じゃあな！」

締羅はティオを抱えると一気に速度を上げた。さすがに達弘も追って来れなくなったようだ。彼は止まって膝をついていた」

「ふう、諦めたか。食った後のダッシュはけっこうしんどいな」

「どうして逃げるんですか？」

「それは・・・その、まずい状況だからさ」

「なんか疲れてるみたいです。大丈夫ですか？」

ティオは締羅の顔を覗き込んできた

「このくらいなんともない。少し休めば大丈夫だ」

「あの、よければ私に乗って帰りませんか？」

ティオは少し恥ずかしそうに言った

「乗って帰るってまさか・・・ちよつとまってくれ！こんなところでそんな」

「さあ、乗って下さい」

ティオは締羅の答えも待たず龍に変身した

龍に乗るのか。これはこれでいい機会かもしれない

「じゃあ、お言葉に甘えさせてもらおう」

締羅は龍の背中に飛び乗った

「ちょうどいい所に乗ってくれましたね」

「そうか？」

「準備はいいですか？」

「ああ、いいぞ」

「はい、ではいきますよ」

そう言うとティオは青く輝く大きな翼を広げ、一気に飛び上がった。ティオはどんどん高度を上げて行き、雲より少し下辺りまで来ると、真っ直ぐ飛び始めた。下には東京の神秘的な夜景が視界いっぱいに広がっていた。

「うわあ、絶景だな」

「この街はとても綺麗ですね」

「ああ、この明かりは全部人間がつくったんだぞ？」

「すごいですね、人間って」

そのとき締羅はティオと同じことを考えていた

本当にすごい。青の世界がこんな技術作り出せるようになるまで、後どのくらいかかるだろう。

俺の行った未来はもつとすごかったな。これより何倍もあるずっと高いビルが立ち並んでいたし、たくさん飛行機とかも飛んでいたし・・・はっ！！

締羅はあることに気がついた

「ティオ、すぐに降りるんだ！早く！」

「あ、は、はい！」

ティオは見え始めていた締羅の家に真っ直ぐ急降下した

危なかった。あそこで飛行機のことを考えていなかったら今頃・・・

そう、ここ東京は都会なだけに人も多いし、その分飛ぶ飛行機も多かった。締羅はそのことに気づき、見つかつてはまずいと思いティオを降ろさせたのだ。

家についた締羅は、龍の姿のまま家に入ってきたティオを珍しいものを見るような目で見ていた

居間に入るとテーブルを挟んで3人分程座れるソファが置かれている。

締羅はソファに座ると、ティオはもうひとつの方に座った。ティオの姿は意外と細身な龍で、普通に抱えられそうだった。締羅よりは大きいが。

「で、この世界についてだが・・・」

締羅はそれからこの世界はどんな世界なのか、どんな国があるのか、どれだけの技術をもった世界なのかと、この国の決まりを全て教えた。

「まあ、一度に覚えるのは大変だろうから、そのうちに勝手にわかってくるさ」

「結構複雑なんですね。この世界は。ふあああもう眠いですう」

「ああ、そうだ。ティオの部屋まだ用意してなかったなあ」

「私は締羅様のものなんですから、好きにしていいいんですよ。でもあまり離れたくないです」

「そんなこといってもな・・・俺、布団敷くからティオは俺のベッドで寝るんだ。いいな？」

こうして二人は締羅の部屋に向かった

どうして同じ家にいるのに部屋が違っただけでそんなにさびしそうにするんだ？

などと締羅は布団を敷きながら考えていた。ティオは既にベッドの上に乗って体を丸めていた。さすがに龍の姿では狭いようだ。

「じゃあおやすみティオ」

締羅はそう言いながら電気を消し、布団に包まった

「おやすみなさい、締羅様」

ティオもそう言つと眠りについた

龍の姿ばかりか、寝息の音も大きく、締羅はすぐには寝付けなかった



第十二話 ティオと共に学校へ（前書き）

遅れてすみません・・・

## 第十二話 ティオと共に学校へ

「青の世界」

その世界のとある街に2人の少年と1人の少女がいた

「みんな分かっていると思うが、ティラが向こうに行って3年経とうとしている」

と赤髪の少年

「もうすぐ帰って来るんだね。ティラとはやく会いたいよ」  
もう一人の紫髪

「私達のこと、忘れたなんてことは無いだろうと思うけど・・・」  
紺色の髪の少女

「あいつ、向こうでは結構平和に過ごしているだろうから、あまり戦いとかはやらないだろう。かえってきたら、たっぷり戦ってやらないと。腕も衰えているかもしれないしな」

「おいおいルアス、それはいきなり過ぎないかなあ。ちゃんと今までのこととか、向こうではどんな風だったとか聞くべきでしょ?」

「ん、そうだな。じゃあそれが終わって落ち着いたところでやるか」

「それがいいわ、それよりレアンは戦わないの?」

「どっちでもいいよ、僕は。フィールはどうするんだよ?」



「しないわよ・・・」  
早く帰ってきて欲しい。締羅・・・

そのころ現実では

「ああよく寝た。何時だ今・・・ま、まじか！？まずい、遅刻だ！！」

締羅は飛び起きようとしたがなぜかティオ（龍）がベッドから落ちて締羅の上で寝ていた。しかも締羅に巻きつくように寝ているので身動きが取れない

やけに重いと思ったら、ティオだったのか。じゃない！こんなときに限って！

締羅は体に巻きついていてティオの体を解き、着替える

「くそ、急がないと。朝食はやむ得ず抜きだ」

締羅の通っている学校は9時までに着かなければならない。今は8時20分だ。電車で通学なので駅まで徒歩で10分、乗車時間は20分、着いた駅から学校まで5分程度。何とかかなりそうだが、電車が遅れたりする場合がある、そうなるのかなりのタイムロスになり、遅刻も間違いないものだ

締羅は全力で駅まで突っ走った。かなりの速さである。追い越して

いく人も、擦れ違う人も皆締羅の方に振り返った。よほど速く見えるのである。

「よし、ついた！」

締羅は駅に入ると券売機に突進し、切符を買ったと急いで走った。

現在8時27分。走ったので思ったより速く着いた。そこへ丁度電車がやってきた

「おし、ナイスだ！」

締羅は電車に乗り込んだ。車内には誰一人締羅の学校の生徒の姿は無い……

さすがにこの時間だからな……誰もいなくてあたりまえか。

8時48分。1分遅れで駅についたが、十分間に合った。締羅は駅を飛び出し学校へ急ぐ。

「間に合いそうだな、あぶなかったな……」

と、そう呟いた瞬間

「……様あゝ」

「ん？」

「て……ら様ゝ」

聞き覚えのある声がしたと同時に、締羅の真上を大きな龍の形をした影が現れた。

「ティ・・・ティオか!？」

「締羅! やつと追いつきました!」

「追いつきましたじゃない! まず姿を戻せ!」

「はい、すぐに」

「・・・戻りました」

「なんで追ってくるんだよ! 留守番はどうした?」

「だって家にいるばかりじゃ退屈だから・・・」

「はあ、あのな、お前が学校にいとまずいんだよ」

「どうしてですか?」

「え?・・・それは、なあ、なんと言っているのか・・・じゃなかった! そんな場合じゃない!」

締羅は時計を見た。あと5分でホームルームだ

「つく! とりあえずこれを飲め!」

締羅は薬のようなものを召還し、ティオに渡した

「これは？」

「透視体薬だ、これでティオは見えなくなる。効果は半日だから十分だ。俺は千里眼薬を飲むから問題ない。行くぞ！」

「あ、はい」

締羅は急ぎに急ぎ、学校へ飛び込んで廊下を突っ走る。そして締羅のクラスの1年B組の教室が近づいてきた

ガララッ！

「おう！締羅。ギリギリだったぞ」

達弘がそう言った瞬間チャイムが鳴った

「ふう、セーフだ」

締羅はほっとして席に座り、ため息をつく

「よかったですね、間に合って」

「ああ、そうだな」

「どうしたんだ、締羅？」

「ああいや、なんでもない」

俺以外はティオが見えないんだよなここは心で話かけるしかないな

「ティオ、心で俺を呼んでみる」

「締羅様」

「そうそう、そんな感じだ。今日学校から帰るまではこの状態で会話だ。いいな？」

ティオはこくんとうなずいた

ホーミルームも終わり、休み時間に入った

「締羅よお、昨日の子は誰だったんだあ？」

「ああ、ティオだが？」

「そうだったのか？随分大人っぽく見えたけど・・・」

「気のせいじゃないのか？服装とか変わってると、見間違っこともあるさ」

「んゝそうかあ？まあいいか」

「すごいこと教えてやろうか？」

「お、なんだなんだ？なんかあったのか？」

「絶対に声上げたり、人に言うなよ？もしそれを破ったら・・・わ

「かってるな？」

「わ、わかった！神に誓う！」

「よし、あのな、ここにティオがいる」

「な、なんだってー！」（小さな声で）

「今は見えなくしている。見たいか？」

達弘は土下座して手を合わせた

「はは、そこまでんでも・・・ほら、これ飲め」

「んぐ・・・お、おおお！」

「どうだ？」

「見える見える！かわいいなあ！見てるだけでいやされるっう（小さな声で）

「そ、そうか？まあ自己紹介でもしたらどうだ？」

「こんにちは。私はティオ。よろしくね」（小さな声で）

「は、ははは、はいー！達弘ですう！」（小さな声で）

「お、そろそろ授業だ、座るんだ」

「ああ、そっだな！」

## 一時間目

達弘は俺のそばにいるティオを見つめっぱなし。まあ、達弘は俺の右上だからずっと振り向きっぱなしというわけだ。だから先生に何度も注意されているが、こりずに振り返る。と、そのときティオがにっこり微笑んだのだが、なんかかわいかったなあ。そのティオの笑みをみた達弘はその瞬間、顔を真っ赤にして鼻血を両穴から噴出しながら、ひっくり返ってそのまま気絶し、保健室へ運ばれた。俺はそのとき笑い出したくてたまらなかったな。

## 二時間目

体育で走り幅跳びなのだが、俺は手を抜いて5メートル。ほんとに10メートルも楽しんだが、それはとても無理だ。で、達弘が負けじと走ろうとしたとき、ティオががんばれ〜というふうな感じで手をふったのだが、達弘は頭が爆発しそうなくらい真っ赤になり、先生の合図を無視して走り出した。物凄い速さだったな。そのままジャンプした達弘はなんと7メートル飛んでいたが、勢い余って前にすっころんでしまった。ティオの応援さえあれば全国大会も夢じゃないな。

## 三時間目

ティオは眠くなったと言って眠ってしまった。しかも俺によりかかって。しかたないのでおんぶ状態で俺は授業を受けた。達弘は羨ましそうな顔でず〜っと見ていた。

後の事は省略（笑）まあ同じようなことばかりだったから言うこと

もないだろう。そして放課後。

「じゃな、締羅」

「ああ、またな」

締羅はなにか胸騒ぎを感じた

「なんか嫌な予感が・・・まあいいか」

いつものように帰っていると、ティオの姿がすこしずつ見えてきた。  
薬の効果がきれたのだろう

「あ・・・」

「お、もどったか。家に着くまでもってほしかったが、ここまで持ちこたえられれば上出来だな」

「達弘さんは大丈夫でしょうか。鼻血が出てましたが」

「ああ、気にするな。よくあるから」

「そうなんですかあ」

「そう」

こんなふうに話をしながら平和に帰り道を歩いていた・・・が、そこで災難が襲い掛かることはまだ締羅は知ることはない・・・





### 第十三話 力の秘密

ティオと二人で帰っていた。すると10メートル程先にある曲がり角から家の学校の制服をだらしなく着た生徒が出てきた。その人数は12人。その中に見覚えのある顔が2、3人ほどあった。その生徒はまさしく以前締羅が吹き飛ばした奴だった。

「っ!!」

まずいと思ったがもう遅かった。ばったりと会ってしまい。隠れることは不可能だった。

「あ!てめえこな間の!よくもやってくれたな!!」

「お前は・・・リーダーみたいだな」

「おおとも。たっぷりお返ししてやる。お前らこいつをおさえろ」

「まずい!ティオ、俺にかまわず逃げろ!」

「ええ!でもっ!」

「いいからいけ!」

ティオはすぐに人気のある場所へ逃げ込む。ティオの安全は確保だ。あとは・・・

「さて、少しは痛い目にあってもらおうか!」

不良リーダーの克之はおもむろにサバイバルナイフを取り出した。  
それをティオは影から見ていた

「て、締羅様・・・」

ティオはどうすることもできずただ見ているしかできない

「く！、動けない・・・！」

締羅は右腕が唯一動かさず、あとは何もできない状態だ

「俺の一撃を食らってもらおう。でりゃあああああ！」

克之は振り上げたサバイバルナイフを一気に振り下ろす

頼む！防いでくれ！ 締羅は右腕を出して頭をかばう。

ガキーン！

鉄のぶつかり合う音と共に液体が飛び出す音。締羅の右腕にはサバイバルナイフが刺さっており血が溢れだして腕を伝い、地面にしたり落ちる。締羅は表情一つ変えずにいた。

「て、締羅様！！」ティオが呼びかけるが締羅は黙ったままだ

「・・・」

締羅はサバイバルナイフを弾き飛ばした。そしてその腕を振るった。

その腕に当たった2人の不良が吹き飛んだ。そして殴るときの構えになる。すると締羅の腕の皮膚が銀色になり、腕に吸い込まれていた。そしてその皮膚の下は鋼鉄の腕だった。いくつかの溝があり、そこからは青い光が漏れていた。

「な、なんじゃこりゃあ！」焦る克之

そして締羅はその拳に力を送る。すると手首あたりから腕輪のようなものが現れ、そこから何本もの棒が出され、青い稲妻を放つ。その稲妻はバリアーのように放たれており、締羅を包み込める程の大きさだ。その圧倒的な力を放つ拳は克之の真横にあった木にぶつかった。

ドガン！

木にぶつかったその拳から稲妻を帯びた衝撃波が放たれた。木はバラバラに砕け散り跡形もなく消えた。

「ひ、ひいいい！なんなんだよてめえ！何者だ！」

「天青 締羅。そのままだ」

「うぐぐ・・・（こんな奴に俺たちがかなうわけねえ。ここは一旦ひくしかねえな）に、逃げるぞ！おめえら！」

そして不良たちは我先にと逃げ去っていった

「く、まだ一年経っていないのにこの力を使うと結構くるな・・・」

そのまま締羅の意識は遠くなり、視界も閉ざされた

「締羅よ・・・」

「あ、て、青帝」

「使ってしまったか。まあ今回は仕方なかっただろう、龍が危険だったからな。しかし、ほんのわずかしき力を発揮できなかったよ  
うだが」

「すみません。約束を破ってしまつて」

「いや、いいのだ。それよりも仲間のところへは戻らないのか？  
みんな心待ちにしているようだぞ？」

「ああ、そうか・・・もう3年になるんだな。そうですね。力が戻  
り次第すぐに戻りたいと思っています」

すると天王は微笑んだと思うと少しきつい顔をした

「フフ・・・大切な仲間だからな。早くあつてやるといいだろう。  
しかし力がまだ戻つてないときにこの技をつかうとやはりお前には  
かなり負担がかかる。なにせ今は少しの力しか使えないからな」

「はい、力が戻るまではもうこの力は使いません」

「うむ、お前の体のためにもつかわないほうがいい。では、がんば  
るのだぞ。あと少しの辛抱だ」

「ううん・・・ここは」

気がつくとも締羅は家のベッドにいた

俺は外で気を失ったはずなんだが

と、思っていると、ティオがベッドの横にある椅子に座って眠っていた

ティオが運んでくれたのか？それなら後で礼を言っておかないとな

「力の復活は後どれくらいなのだろう。この様子だともうすぐ言うって良いほどなんだが」

「うーん。あ、締羅様！きがついたんですね。よかったあ！」

「あ、ティオ・・・ってお、おい。いきなり抱きつくなよ」

驚いたいきなりだきついてくるもんだから。ん？腕に包帯が・・・もしかして、ティオが手当してくれたのか？じゃあお礼は倍だな

「この怪我の手当ではティオがしてくれたのか？」

「はい、あの、慣れないもので違和感がありましたらごめんなさい」

「いや、なかなか上手くできてるぞ。あと、俺を運んでくれたんだ

る？家まで」

「はい、今の私じゃ無理だったの。龍になって運びましたが」

え？い、今なんて！？

信じたくなかった。

「だから、家まで龍になって運んだんです」

「ああ、もう駄目だ。人にティオ（龍）見られたのか・・・はあー  
ー」

俺は絶望してため息しかでない。ああ、もうおしまいだ、明日の新聞が気になってしかたないくらいだ。

「どうかしたんですか？締羅様」

「うんや、なんでもない。というより腹減ったな。買い物行かないと」

だが外は嵐の如く雨風が激しかった。                      そっいや、ティオを見つけたときもこんな天気だったな。稲妻が落ちてきて、その跡を見に行ったのがはじまりなんだよな

「でも、こんな天気では無理がありますよ」

「ああ、今日はもういかない、前に買い溜めしといたのでなんか作ってたべようか」

「はい、そうしましょう。私にも手伝わせてください。」

「ん？別にかまわないが、料理できるのか？」

「はい、こう見えても料理は得意なんです」

「ほう、意外だな。じゃあ手伝い頼む」

「はい、おまかせください」

締羅が材料を取ろうと冷蔵庫に近寄った瞬間だった。

ピシャーーン！！ドゴーン！

一瞬部屋が真っ赤な光いっぱいになり、すまじい轟音が響きわたる

「きゃあ！雷ですー！」

「というより停電したぞ。よほど近かったんだな。とりあえずブレーカー戻してくる」

「え、置いてかないでくださいーい！」

真っ赤の雷だったな。ティオのときは真っ青だったけど……  
っ！！もしかすると……

ブレーカーを戻した締羅は外に出てみた。そのとき彼は激しい胸騒ぎを感じた。雷は締羅を家の玄関からですぐ前の道の先の野原に落ちていた。野原といったも空き地だが。そこにはティオとあったときに落ちた雷の穴とほぼ同じ大きさだった。



「な！あ、赤い龍だと！？」

・ 彼はまたも絶句した。今度はその穴に真紅の龍がいたのだから・・・

## 第十四話 真っ赤な誓い

その雷の落ちた穴にいた龍。それは真紅の鱗を持つ、ティオと同じ形の龍だった。

「・・・・・・・・・・」

俺は驚いて言葉もない状態だった、まあこうしていても仕方ない。ひとまず家へ運ばないと。

「締羅様。どうしたんですか？」

「ああ、ティオ。お前に似た姿の龍が赤い雷と一緒に降ってきたんだが、仲間か何かなのか？」

仲間だとすれば話は早い。和解にもそうかからないだろう。だが締羅の期待は背かれた。

「うーん、見たことないですね。確かに私と同じ龍の姿ですが、全く見覚えがないですね」

「そうか。ティオもこんなふうにして降ってきたんだぞ。またこうやって同じようにして、同じ場所に降ってくるというのはやはりなにかあるに違いないだろう」

「例えばなんですか？」

「向こうの世界のどこかに、時空の乱れが度々起こる不安定な空間の場所があるのかもしれない。で、そこに通りかかった龍がちょう

どそのとき発生した時空の歪に吸い込まれて、ここに飛ばされたということも考えられるかもしれない。何故そのとき此処の天氣が荒れるのかはわからないが」

「ふーん、そうなんですかあ」

「あくまで予想だからな。そうとは限らないだろう」

「私もこんなふうにして降ってきたんですね」

「ああ、そうだ。そんなときや驚いたぞ。いきなりだったから。そういえばこっちに飛ばされたときのことは覚えてないのか？」

「はい、さっぱりです。全く記憶にないんです」

「そうか・・・この龍も怪我してるな。ティオと同じ程度だが」

締羅はひとまず傷を癒してやったが、目は覚ます様子は見られない。

「呼吸も心拍も問題ないんだがな。毒があるとしても俺のこの回復術で一緒に消える筈だ。まあ、そのうち目を覚ますだろう」

「大丈夫なんですか？」

「俺もここまでが限界なんだ。これ以上高度な魔法は使えないな。力を封じられてるからな」

「なぜ力を封じたんですか？」

「この世界では無用なんだ。むしろその力自体の存在がありえない

からな。だがこういう、どうしてもという状況に応じれるように、必要最低限度の力は使える。」

「完全には封じていないんですね」

「ああ、そういうことだ。さあ、夕食を食べて風呂入ってねるか」

「そうですね、この龍さんはどうするんですか？」

「そうだな・・・うーむ。ティオの部屋を至急作る。そこで寝てもらうことにしよう」

「ええ、私は締羅様のお隣で寝ようかと・・・」

「却下。いいか、ティオはこの龍の様子を見てやるんだ。寝ている間に死にましたなんてことはごめんだ。しばらく様子をみて異常なければティオも寝ていいぞ。そうしたら後で御褒美だ」

「わあ、嬉しいです！って、そのご褒美とはなんですか？」

「そうだな、好きなだけ甘えていいぞ。ただし！加減を忘れるな」

「わかりました。えへへ」

なんか妙に嬉しそうだな

そして夕食も片付き、風呂に入り、さあ寝ようかという時間となった

「さて、ティオの部屋なんだが、一応しまってたベッドと机を

置いてある。部屋の空いた場所に布団を敷き、そこに龍を寝かせる。  
いいな？」

「はい、わかりました」

「よし。それじゃあ龍を運ぶぞ」

「どのあたりを持てばいいですか？」

「腹あたりだ」と言おうとしたのだが

「グルル・・・」

「あ・・・」

二人の声が重なる

「龍をおけ！」

二人ともさつと龍を降ろす

「グ・・・グル？」

龍はわけがわからないという顔をしたが、すぐに二人を睨めつけてきた

この感じ、ティオと同じだな。なんとか沈めなければ・・・

「グルルル！」

龍はエメラルドに光る二つの目で二人の動きを警戒する

「大丈夫。危害を加えるつもりはない」

すると龍の引きつった顔が緩む。締羅は手を差し出す

「さあ、何もしないから」

すると龍は締羅の手に頭を伸ばす。そして締羅は龍の頭に手を置き、優しく撫でる。すると、龍は気持ちよさそうに目を閉じる

和解成功だ。ティオのときよりもスムーズだったな

龍は締羅に近寄ると、身を預けてきた。そう、のしかかりだ。だが締羅はいやというほどティオののしかかりをくらっているのか、ころうじて受け止めることができた。

「うわ、いきなりだな。人間の姿にはならないのか？」

締羅がそう尋ねると、龍は目を閉じた。すると龍が赤い光に包まれ、光の球体となる。その球体が龍の形から人の形へと変わる。次の瞬間には、龍の姿は消え、変わりに赤いローブを身にまとった13〜14歳くらいの少女の姿があった。真紅に輝く髪を巨大なツインテールに、童顔、エメラルドの瞳を持ち、おとなしそうな顔をしていた。

すると突然龍がしゃべりだす

「こんにちは、お兄様。私の名前はレイジンといいます。これからもどうぞよろしくおねがいします。お兄様のお名前は？」

「え、あ・・・お、お兄様？」

するとレイジンはにっこり微笑む

「お、俺は天青 締羅だ。よろしくなレイジンさん」

「そんな、さんなんてなくて、レイジンでいいですよ」

「あ、そ、そうかレイジン」

「じゃあ、早速契約といきましょう！」

レイジンは締羅の手を握る。

「ここに、紅龍との契りを結ばん！」

すると赤い閃光が部屋を覆う。視界が回復すると。そこには少し大人びたレイジンがいた15〜16歳くらいで、長いリボンが二つの大きなツインテールを支えている。

「契約完了です。お兄様。これからは、共に過ごしていきましょう」

「え？、あ、ああ」 はあなんかややこしくなってきたようだ

こうして新たに、レイジンという龍が締羅の家族に加わったのだった・・・





## 第十五話 テイラの過去夢（前書き）

テ「どうも、読んでくれて非常に嬉しいです。作者も感謝していますよ」

作「あ、ども。初めて書く小説なんですが・・・^^；多少へたくそな面があるかもしれませんが、頑張りますのでこれからもよろしくおねがいします」

ティ「あの、気づいたことがあります」

作「何？」 ティ「テイラ様の名前が締羅じゃなくてテイラとカタカナになってるのですが」

テ「ああ、元々カタカナなんだ。現実の世界では漢字にしてるだけさ」

ティ「じゃあ交互に使っていくんですか？」

作「いや、そうすると読者もこんがらがってくるから、これからはカタカナでいきたいとおもってる。ということで読者の皆さんよろしくおねがいします」

全「では、引き続きお楽しみください」

## 第十五話 ティラの過去夢

荒らされた大地。その地を駆ける無数の兵士達。交り合う武器の音。飛び交う矢、大砲の弾。終わりを告げない何度も起こる、そして続く戦。

ここは青の世界の7大大陸の一つ、北半球に位置し、7大大陸では3番目に人口の多い大陸だ。その大陸の名はガイネーブ大陸。そしてその中の国々の境界線。そこでまた戦は起こっていた・・・

兵達は皆、家族のため、生きるため、愛する人のため、平和のため、欲のため、国のためなど、様々な気持ちを持つ者達だった。中には、戦いこそが自分のためになるという者もいた。

攻め込んできた国アリヴ。

戦を得意とする者達ばかりの軍をもち。ガイネーブ大陸最強の国といわれているのだ。一方、平和主義の国シラク。平和主義国とわ言え、他国からの急襲に備え一応防衛軍はあるのだが、兵の数も力もアリヴとは桁違いである。シラクの兵達は祈術という、特殊な祈りの力もち、その力を武器として戦っている。が、剣術などはあまり期待はできるほどではない。

そして今、圧倒的にシラクは押されていた。5つの砦の内4つを突破し、既に最後の砦へと迫りつつあるのだ。そこで危険を悟ったシラクは、援軍を要請した。強力な祈術を使う者達だ。その中にいる一人の少年。彼の名はティラ。青き強大な力を誇る、かつて赤の世界より攻め込んできた大軍をその力を解き放ち、闇へ返したという、伝説の勇者、その後継ぎが彼なのだ。そのことはこの世界の者達は

知らない。ある一部の人を除いては。そして彼以外は・・・

シラクの王都、カルゼア。そして都の中心にそびえたつカルゼア城の謁見の間。

「おお、ようやく来たか。既に分かっていると思うが、我が国は今、重大な危機にさらされているのだ。戦場の最後の砦を突破されれば、奴らの軍は一斉にカルゼアと向かってくる。そうすれば民達は危険にさらされることとなる。即急に応戦を願いたい。どうか、我が国を守ってくれ。天絶部隊よ」

王らしきものが天絶部隊といわれた10人ほどの部隊に頼む。

すると天絶部隊の隊長と思われる者が出た

「引き受けました。アリバス国王。我々天絶部隊が勝利に導いてみましょう」

「頼もしき言葉だ。では、頼んだぞ」

「はい・・・、皆の者。すぐに移動だ」

はっ！と隊員たちは声を上げた。そして一人一人が光に包まれ、消えてゆく。瞬間移動といわれるものだ。そしてアリバスの前にはもう天絶部隊の姿は無かった。

「頼んだぞ」

最後の砦・最終防衛ライン

「將軍、アリヴ軍は最後の砦へと接近しつつあります。いかがいたしましょう?。」

「むう。ここを突破されてはカルゼアが危険にさらされる。今援軍がこちらへ向かっているはずだ。援軍が到着するまでなんとか耐え抜くのだ」

「はっ!」

数分後、アリヴ軍は最後の砦に到着した

「これが最後の砦か・・・さすがに最後だけのことだけはあって大きいな。まあ、どの道潰すがな。ハーッハハハ!」

アリヴ軍の將軍は声高らかに笑う

「ミルセア將軍。伝令です。敵に援軍が加わったとのことですよ」

「ふん、援軍など無駄なことをしておって」

「それが、その援軍が天絶部隊とのことなのですが・・・」

ミルセアと呼ばれた將軍の顔が引きつる

「なに!? 天絶部隊だと!? ふん、ふん! 叩き潰してくれようじゃないか。行くぞ! 進軍開始!」

ちょうどそのとき、天絶部隊が到着した

「將軍、援軍が到着した模様です！」

「おお、そうか！早かったな！」

「將軍、お待たせしました。天絶部隊隊長ムルサユです」

「よくきてくれた。では、頼むぞ！」

「はい」

こうして天絶部隊は戦場へと到着。まだアリヴ軍は来ていない。この砦のつくりは前に大きな門があり、それからしばらく進んだ所にこの砦がたっている。80メートルほどの高さを誇り、カルゼアからもきれいに見える。

そして砦の間に立つ。そして横に広がる。一人ずつの間隔が同じくらいに離れると。全員が一斉に黒く輝く剣を黒いマントの下で鞘から抜く。

「いいか、なんとしても食い止めるのだ。皆、力を尽くせ！」

「はっ！」

「やるか、テイラ。お前なかなか腕がいいそうじゃないか。あの隊長が認めるくらいだ。その腕前、見せてもらおう！」

「ふっ、まあがんばろうじゃないかルアス」

しばらくすると遙か彼方先にアリヴ軍が見え始めた

「行くぞ、全員戦闘準備に入れ！」

全員が剣を真っ直ぐアリヴ軍へ向ける。そして呪文を唱える

「フォースエクニテストタル！」

すると全員の剣が光り、刃先から赤いレーザーが放たれ、真ん中に立つムルサユの剣に集まり、さらに太いレーザーを放つ。

ドカーーン！！

レーザーが過ぎていったところの地殻が真っ赤に溶けて膨れ上がり、大爆発を起こした。最前線の兵達が跡形もなく消えた。

「な、なにぃ！？天絶の力はこれほどにも成長していたのか！？ええい、突っ込めー！」

アリヴ軍の進軍速度が急激に上がった

「っ！来るぞ。皆生き残るぞ！」

そして天絶部隊は散開した

天絶部隊は次々とアリヴ兵を倒していく

「俺は一気に將軍を討ち取る！あとは任せる！」

「ああ、気をつける！」

「そっちな」

こうしてティラは仲間と離れ、敵將の元へと走る

「む！貴様は天絶の一人か！」

「覚悟！ミルセア將軍」

ガキン！

剣が交じり合う。

「ほう、なかなかやるな・・・」

「俺の力はこんなものじゃないぞ。大天烈斬！」

剣を振り上げ、ミルセアを空高く放り上げる。そのままミルセアを追うようにしてティラも飛び上がる。そして青い炎をまとった剣で強力な斬激を連発する。計17発の斬激を与えた後、一気にその高さから地面に叩き落す。普通の人間では耐え切ることとは不可能だろう。

「ぐは！ま・・・まさか、こ・・・れほど・・・と・・・は・・・」

そしてそのままミルセア將軍は倒れた。

「命までは取ろうとは言わない。その証拠に技に手を抜いた。さあ、

早く自分の国へと帰れ」

ミルセアはテイラを見上げる

「て、敵に情けをかけるのか？」

「あんたはほんとはいいい人間だ。あんたは自分の軍の力の強さに酔っていたに過ぎない。だから、今度からはその力を平和のために使ってほしい……」

「う！？……どうやら私は間違っていたようだな。そなたのおかげで目が覚めた。礼を言おう」

「いや、俺は当然のことをしたまで」

「すぐに軍を引かせよう。この礼、いずれかならずや返して見せよう」

そのときだった。テイラの足元に大砲の弾が当たった

ドカーーン！

「ぐあぁっ！」 テイラは空高く爆風で放り上げられたそのときテイラは右腕に激しい痛みを感じた

「う……」 そのままテイラは地面に落下した。彼は起き上がり、自分の右手を見た。

「な、う、腕が！俺の右腕が！」 するとテイラのすぐ近くに自分の右腕がドサリと落ちる。



「うああああー！！」 彼は痛みにもだえ、苦しんだ。

「おい、大丈夫か？っ！おぬし、右腕が・・・」すぐに運ぼう

そのときだった。テイラのいる場所に魔方阵が現れた。

「な、なんだ」

魔方阵から光がでてテイラを包み込んだ。次の瞬間には、テイラの姿はなかった。テイラの腕もきれいにその場から完全に消えてしまっていた。

「いったいなんだったんだ・・・今は軍をひかせるか」

ミルセアは撤退命令を出した。

「ん？なんだ、アリヴ軍が撤退していくぞ」

「まさかテイラがやったのか。すげえ」  
それかしばらくたった  
がテイラは戻ってこない

「遅いな、テイラ。なにかあったのだろうか」

「まさか、やられたんじゃないのか？それとも捕らえられたのか？」

「こうしていても仕方がない、皆手分けしてテイラを探すぞ」

それから天絶部隊は戦場中をすべて探したにもかかわらず、テイラを見つけることは出来なかった・・・

「う・・・ここは」

見慣れない場所だ。どこだ？ここ

テイラはベッドに寝かされていた。

「は！腕・・・」

テイラは右腕を見た。するともうテイラの腕はなく、かわりに金属の機会のような腕がつけられていた形や大きさは元のテイラの腕と変わりはない

「いつの間にこんな腕が・・・いったい誰が」

すると部屋の扉が開き、人が入ってきた。白いフードつきのマントをきておりフードを被っているために顔が見えない。

「目が覚めたようだな」

その人物はテイラに近寄ってきた

「あ、あの。ここは・・・？」

「ああ、ここか。ここは青の城だ」

「青の城？あなたはいつたい？」

「私は青帝と呼ばれる者だ」

「青・・・帝？」

「そのとおりだ、そなたはテイラというのだな？」

なぜ俺の名前を・・・

「あ、はい。そうです」

「そなたの右腕が失われた。だから新たな腕を捧げた。青き戦士のために・・・」

「青き戦士？」

なんなんだそれ？聞いたことがない

「そう、そなたこそが我が青き力を継ぐものなのだ。その腕は何も自由なく動く。それとその腕に青き力が秘めてある。その腕は元の

腕のように隠すことができる」

青帝がそういうと、テイラの右腕から銀色の液体のようなものがわいてきて、完全にテイラの腕を覆うと、普通の皮膚の色へと変わった。

「す、すごい・・・本物の腕のようだ」

「青の力だ」

「その青の力について、詳しく教えてくれませんか？」

「よかるう・・・青のちか・・・らとは・・・」

あ、あれ？視界が狭くなっていく。声も聞こえなくなっていく・・・

そしてテイラの視界は閉ざされた

「・・・様。おに・・・様。お兄様」

「ん・・・」

「お兄様！」

誰だ？この子。どっかでみたような・・・いや、つい最近な気がする

「ううん・・・」

俺は眠い目えを擦りながら起き上がる

「やっと起きましたね。お兄様」

「お兄様？」

この響き、聞き覚えがある。はっ！

ティラは全て思い出した

「レイジンか」

ティラは右腕を見た。この腕になってどのくらい経つのだろうか？  
なんだか懐かしい夢を見たな。まだ天絶部隊に居たころの・・・

ティラは結構夢の内容を覚えていた。夢の内容を覚えていることと  
いうのはあまりないことだ

「朝から元気だな」

「何いつてるんです？もう１１時ですよ」

「っ！しまっ・・・」

「今日は土曜日ですよ」

「ああ、そうだった・・・って、いい加減俺の上から降りてくれ」

「あ、ああごめんなさい。とんだご無礼を」

「はは、そこまでいわなくても」

ティラはリビングへ向かった

「あ、おはようございます。随分と眠ってましたね」エプロン姿のティオが出てくる

「ああ、懐かしい夢をみたよ」

「そうなんですかあ。あ、そこに朝食ありますから」

ティオがテーブルを指差す

「ありがとう、わざわざ」

ティオは顔を少し赤らめた

「いえいえ、このくらい別に」

この二人も一緒につれていくのか・・・なかなか楽しくなりそうだ。早くもどりたいものだな。

テイラは仲間達との再会がとてもたのしみになっていた。そしてその時間は刻々と迫りつつある・・・

## 第十六話 誘い損1

皆と再会するのは嬉しいことだが、それと同時にこちらの世界の人も別れを告げなくてはならない。だが、二度と戻ってくることはないというわけではないのだから。そう悲しむ必要はないだろう

俺はもう向こうの世界へ帰る準備へと入った。準備とは、荷物や2人の龍たち。学校のこともある。一番問題なのが学校だ。先生には辞めるというのはまずいから、家庭の事情で引越すことになったということにするつもりだ。それと友達との別れ。最後に遊んでおきたいと思っている。

「テイラ、何ぼんやりしてんだ？」

顔をあげるとそこには達弘の姿があった。いつもとかわらない表情・・・俺が転校すること知ったらどういだろうか？

「あ、ああいや、何も。ただ今日の夕飯のこと考えてたんだ」

「昼飯食ったばっかなのにそんなこと考えてたのか」

達弘がどうかしたのかという顔で見てる

「あ、はは・・・まあな」

そのとき一人の女子がテイラのところへやってきた

「ねえ、テイラ君」



「ん？花宮か。どうかしたのか？」

「今日そっちの家と一緒に勉強させてくれないかな？」

顔を赤らめて恥ずかしそうに言う

知り合つて随分経つというのになんで赤面なんかするんだ？第一家にはあの二人がいるし・・・無理だな

隣では達弘がニヤニヤしている

なんだその表情は。ティオがいるから俺にとってはまずい状況だということにわかっているようだ。だがしかし、もう一人居ることは知っていないようだ。だからさらにまずいんだよ

「い、いや。俺は一人で勉強したい方なんだ。だから・・・」

「どうしても・・・駄目なの？」

なんでそんな泣きそうな顔でみてるんだ。

「ティラ。女の子を泣かしたら、男の恥だぜ？」

意地悪そうな笑みを浮かべる達弘

だが、俺は戻らなければならぬ。そうするとこの二人とはかなりの時間合えなくなるだろう。今のうちに色々としておいたほうがいいか・・・

「わかった。来ていいぞ」

すると花宮はやったと嬉しそうに跳ねる。

学校終わったら大急ぎで家に帰らないと・・・

そして放課後はすぐに迫った。

「寄り道すんなよ」と先生は言うが皆はほぼ無視している。随分と紹介が遅れたが、彼の名は青木真弘<sup>あおきまことひろ</sup>。23歳の男性の若教師だ。担任で結構しつかりしている。女子にもいくらか人気があるようだ。と、先生の紹介はここまでにして俺は早く帰らないといけない。

教室を出ようとしたが不意に声かけられる。

「テイラ〜」

「ん、なんだ功樹」

彼は宮本功樹<sup>みやもとこうき</sup>こちらも仲の良い友達である。髪型はツンツン型で、結構マニアックである。特にメイドが好きらしい。

「遊ばないか？」

「すまんが今は大変忙しい。また今度だな」

「ちえ〜、わかった。んじゃまたな」

「ああ、ってしまった！急がないと」

ティラは教室を飛び出し、下駄箱に行き靴に履き替え、そのまま急いで校門を出て駅を目指す。

「なんとか間に合ってくれ・・・！」

駅に入るとティラは慣れた手付きで切符を買って改札機に放り込んで電車まで突っ走る。

ピロリロリロリロと電車が出発を知らせる音が聞こえる。

後少しだ。と思ったのだが。

「うあつとー！」

駆け上がっていた階段の最後の一段に虚しく足を取られた。ティラは地面に素早く手を着き、そのまま前転して受け身をとる。怪我はしなかったが電車はいつてしまった。

「くそっ」

ティラは駅を出て近くの住宅街を出て人気の無い場所へ向かう。

「ここでもいいな」

ティラは手を空にかざした。するとティラの頭上に時空の歪が発生し、そこからスケートボードのようなものが現れた。

それには車輪がなく、地面から少し浮いていて後ろの方にジェットエンジンの様なものが二つ付いていた。その横には折り畳まれた翼のようなものがついている。

このボードにはエクシヨンボードと書かれていた。明らかに現在の

技術では製造不可である。実はこれもテイラが誤って移動した未来から持って帰った物の一つだ。

テイラはエクシヨンボードに乗った。

するとボードは高度を上げ、約10メートル程まで上がると、ジェットエンジンを起動させた。するとエクシヨンボードは凄まじい速さで空を駆けた。時速500kmは出ているだろうか。人が耐えられるような速さではないが、このボードには特殊な目に見えないバリアが張つてあるので問題ない。そしてテイラは家を目指して飛んで行った。

「今夜の夕食はハンバーグなんてどうかな？レイジンさん」

「レイジンで結構よ。でもこちらもティオと呼ばせてもらってからねー」

「全然かまわないよ」

「ハンバーグかあ。なにそれ？初めて聞くんだけど美味しいの？」

「うん。前にテイラ様が私に下さってね。とても美味しかったの」

「へえーそうなんだ。じゃあ食べてみる価値あるかも・・・」

二人が家から出て道に出たそのときだった。

キーーーン

「ティオ、何かこっちに飛んでくるみたい」

「なんででしょうね」

その飛んでくる主はテイラである。テイラはこちらを見上げている青髪と赤髪の二人の少女に気が付いた。

「テイオとレイジンじゃないか。何処へ行くつもりなんだ」

「あ、あれはテイラ様だわ。テイラ様ー！」

テイオが嬉しそうに手を振っている。

テイラは二人の前に降りた。

「あ、お兄様！」

「二人とも早く家に入るんだ。」

「え、何故です？」

「それは後だ。今はとにかく家へ」

テイラは二人を家に入れると、家に花宮が来ることを話した。

「では、私達はその花宮さんに見つからないように隠れているということですね？」

「そういうことだ」

「でも何故隠れる必要があるんです？お兄様」

「まあ、いろいろとまずいんだ。とにかく、花宮がいる間は俺の部屋にいるんだ。いいな？」

「「わかりましたー」」

そしてティラは二人を部屋に入れると花宮を待った。

一方ティラの部屋では

「ティラ様のお部屋は片付いていていいですねー」

「そうだね」

ティオはふとティラのベッドの下を見た。

俺はやらしい物なんて持ってないからな・・・

するとそこには一本の鞘に収まった剣があった。

だからないと言ったろ・・・

「こんなところに剣が」

「お兄様の事だから、もしもに備えて置いてあるのでは？」

「そうかもね」

その時、客の訪問を伝えるチャイムが鳴った。

「は、はい・・・」

「あの、花宮ですけど」

「来たか・・・」

ティラは玄関のドアを開けた。

「あ、ティラ君」

「来たか、花宮」

「来ましたよ」 つと無邪気な笑顔を浮かべながら言う。

「まあ、とにかく中へ」

「あ、はい。おじやますー」

「こつちだ。ここで勉強しよう。俺は勉強道具取ってくるから少し待っててくれ」

「リビングをするの？ティラ君のお部屋じゃないのお？」

「あ、ああ。ちょっと散らかっているからな。ハハハ・・・」

「あ、もしかしてベッドの下に何かあるんでしょー？」

花宮がニヤニヤしながら見てくる。

ギクッ！！ベッドのしたには剣が・・・！軽く殺傷能力を持つ剣だ。見つかったら銃刀法違反で警察送りだ！なんとか誤魔化せねば！

「何だ、そのまずいモノって・・・？」

「ほら、年頃の男の子が持つてるものなんだけどなあ」

年頃だと？年頃の男の子は剣をベッドの下に入れたりするのかいや、有り得ないな。じゃあ俺は無関係か」

「そんなもの俺のベッドの下には無いぞ。むしろ何も無い」

「そつかー。やっぱり真面目だね。ティラ君は」

なんでそれが真面目なんだ？まあいいか。

「とにかく勉強だ。勉強道具取ってくる」

「はいはい」

やっぱり勉強断わっておけばよかったか・・・？

はあ・・・



## 第十七話 誘い損2

.....

静まり返った居間。カチカチと時計の音が何時もより大きく聞こえるような気がする。

ああ、先程から黙りっぱなしだから気まずい。花宮は問題をスラスラ解いているし、俺と勉強する意味無いんじゃないか？

と思っていると花宮の手がピタリと止まった。

「ん~~~~」

どうやら難しめの問題を解いているみたいだ。

「あゝわかんないよ。ねえ、テイラ君。ここどうやってやればここの答えが出るの？」

数学の文章問題だった。何故数学しか宿題が出ないのだろうか。それはいいとして・・・なるほど。途中までは解けているようだ、どうやらその先の解き方がわからないようだ。

「これか。これはこうやって、ああやって・・・」

「あ、わかった！流石テイラ君だね！」

「ハハ、そうでもないぞ」

今の会話で気まずかった雰囲気は何処かへいつてしまった。

まあ俺は気まずい雰囲気さえなんとかなればよかったがな。

しばらくするとまた静かになり、また気まずい雰囲気に戻ってしま  
う。

ああ、またか・・・なんか家に来ていいと言って損したかな？ああ、  
もう耐えられん。ティオ達の様子見てくるか・・・

「花宮。俺部屋片付けてくるから気にしないで勉強続けていてくれ」

「うん、わかったよ」

ティラは居間を出て自分の部屋のある二階の廊下に行く階段上る。

あの二人・・・おとなしくしていてくれるといいんだけど。

部屋の前に着いたティラはドアを開ける。そしてほっとした。ちゃ  
んと二人とも部屋にいてくれた。が、何故か龍の姿で仲良く寝てい  
る。

まあいいか。寝ているなら心配ないか・・・

ティラは自分の部屋を後にした。ガチャリとドアが閉まると同時に  
二匹の龍の目が開く。どうやら寝たふりをしていたらしい。

「よし、ティラ様は行った。あの花宮とかいう女はどんな人なのか  
が気になるわ」

「お兄様に手を出したら許さないんだから・・・」

「あらレイジン。私の主はティラ様よ。私だけのね」

「いいえ、私よティオ。お兄様はきっと私に気があるに決まってるわ」

「何言ってるの？最初に契りを結んだのは私なのよ！」

「そんなの関係ないわ！」

「じゃあ直接聞いてみるのはどう？まあ私だろうけど」

「そんなのやってみないとわからないわよ」

二人の間に火花ができ、バチバチと音になる。

そして二匹は龍のままなことも忘れ、ティラの部屋を飛び出した。

その頃居間では

「もうこんは時間かあ」

時計の針は七時を指そうとしていた。

「今日はありがとうティラ君」

「礼には及ばないぞ」

「ねえ、ティラ君は好きな人とかいるの？もしかして付き合ってた  
りする？」

「・・・・・・・・」

「あ、ご、ごめんね。いきなりこんなこと聞いたりして。でも気に  
なつたからさ」

花宮は顔を赤らめる

「ああ、俺は今まで好きとか言われた経験ないし、好きな人もいな  
いな」

「そうなんだあ」

花宮はほっとした様子を見せた。

「どうかしたのか？」

「あ、ああいやなんでもないよ。ところでさ、この前学校に来た女  
の子ってまだティラ君の家にいるの？」

「えーとそのこは・・・・」そのとき居間の扉が静かに少し開き、龍ティオ  
が覗き込んできた。幸い花宮は扉に丁度背を向けた形で座っていた  
から気づかない。

「ああ！！」

ティラは扉まで突っ走り、バンと勢い良く閉める。

「花宮、そこで少し待っててくれ」

「え？うんわかった」

テイラは居間から出るとそこにいた二匹の龍を引っ張って部屋まで連れていく。

「あのなあ、ちゃんと待ってると言ったじゃないか」

二匹を部屋に入れたテイラは溜め息をついた

「もう花宮は帰るからあと少し待ってるんだぞ」

そう言うとテイラは居間へ戻った。

「すまないな。花宮。待たせた」

「ううん。いいよ別に。じゃあまたね」

「ああ、また明日」

「なにいつてるの？明日からゴールデンウィークでしょ？テイラ君のおかげでほとんど終わったんだから」

「あ、そうだったな。じゃあまたな」

花宮はテイラに手を振って帰った。

やっぱ今の家に人を入れると損をするな。これこそ誘い損だな。

ああ、なんか疲れた。テイラは部屋に戻った。すると二匹の龍は人

に戻っていた。

「テイラ様。聞いてほしいことがあります・・・」

「なんだ？」

「私とレイジン。どちらがテイラ様にふさわしいと思いますか？」  
「ん？どういうことだ？」

「だからテイラ様は私とレイジン。どちらの方に気があるんですか」

なんでこんなこと聞かれなければならないんだ・・・

## 第十八話 女心・龍心

どちらがいいって言われてもな・・・

俺は今二人の質問に戸惑っている。内容はティオとレイジン。どちらの主でいたいかということになる。

「なあ、ティオと前に合体みたいなことしたじゃないか。レザ・・・  
なんとかだったか？」

「レザクトですか？あれがどうかしたのですか？」

「ええ！？ティオ。あなたお兄様とレザクトしたの？」

レイジンが驚きを隠せないようだ

「羨ましい？」

勝ち誇った顔をレイジンに向けるティオ。

「うっ、なら私もレザクトする！ティラ様ー！」

突然レイジンがそう言うのとテイラに飛び付いた。と、同時にレイジンの体が輝きだし、光の球体となり、テイラの体を呑み込んだ。

「ちょ、うわー！」

「う、ウソ・・・」

光の球体は輝きを増し、一瞬カツと光るとそこには真紅の輝きを放つ防具に身を包み。背丈の倍程もある長く鋭い槍を手にした、レイジンとレイジンした姿のテイラがいた。

「な、なんだこれ」

テイラは突然の事に戸惑っていた

「そ、そんな・・・人間は龍一匹としかレザクトできない筈なのに。それが人間の限界なのに。テイラ様・・・あなたはいたい・・・」

「え、えっととりあえず元に戻りたいんだが」

するとまたテイラの体が輝き、少し経つと元に戻り、テイラの横にはレイジンがいた。



「やったね！テイラ様！私達、レザクトできましたよ！」

「よ、よくも・・・レイジン！私とあなた。一対一で勝負しましょう。勝った方がテイラ様のものよ」

「いいわよ。テイラ様、期待してて下さいね！」

「え？あ、ああ・・・」

「そんなこと言ってるのも今の内。テイラ様、すぐあなたの元へいきますからご心配なく」

「へ？あ、あの・・・」

はあ、これが女心というヤツなのか？さっぱりわからん・・・

二人は龍の姿になると、家を飛び出した。

なっ！？ま、まずい！外行ったら一貫の終わりだ。

だがテイラには今の二匹を止めることができず、そのまま二匹は玄関のドアを開けて飛び出してしまった。テイラも急いで飛び出し、弓と透視体薬の入った瓶を召喚して矢の矢じりに透視体薬をつけ、二本同時に放つ、二本の矢は見事二匹に命中したあまり離れた所になかったから当てるのは難しくは無かった。

「ひとまず姿は消した。だがいつまでも持つことはない。速急に止めなければ」

ティラは千里眼薬を飲むと空を見上げた。二匹の龍は弓が刺さったことにも気付かずに暴れ回っている。そのとき、青い龍のティオが真っ青な炎吐いた。そして紅い龍のレイジンも真紅の炎で迎え撃つ。

「しまった！姿までしか消せないんだった。」

空には青と紅の炎が出たり消えたり。

なんとその火は近くの家に移ってしまった。

「くそ、アクアウェイブ！」

ティラが火が移って燃え上がっている家に手を向けた。

「きゃあ！火事だわ！」

近くにいた中学2年くらいの少女が叫ぶ。

やめてくれ！大騒ぎにしたくないんだよ！

ティラの手が光り、彼の前に巨大な水柱が現れ、凄まじい速さで燃えている家に突き進んでいく。

バシャーーンと大量の水が飛び散る音がする。見事に家の火は消

えていた。不幸中の幸いこの家は空き家だった。

ティラは今だに戦っている二匹の龍に叫んだ。

「おい！もうやめろ！周りに迷惑がかかっているぞ！」

「ティラ様！邪魔しないでください！」

「そうです！これは真剣勝負です！ティラ様は何もしないでください！」

「説得しても無駄みたいだな・・・おい！いい加減にしないと怒るぞ！」

「喰らえ！」

ティオが前足の鋭い爪でレイジン攻撃する。突然の接近攻撃にレイジン反応が遅れてしまう。

ガキ！

なんとか爪で防いだレイジンだったが。攻撃の衝撃までは防ぎきれず、火のついていた家に叩き落とされる。

ドゴンと大きな音がして家の屋根が崩れた。

「いたた・・・やったわね！じゃあこれはどお？」

レイジンは火の玉の様なもの放った。それはかなり速かった。ティオはなんとかかわすがそれはティオを追跡してきた。ティオは火を吹いたが火の玉の方に押され、喰らってしまう。

「うあっ！」

ティオは怯んでしまい、地面に落ちそうになった。

くそ、もう強制的に止めるしかない。

ティオは家に戻ると自分の部屋へいき、ベッドの下にある剣を取り、外へ出た。レイジンはすでに空に上っており、また戦い続けている。

「二人共！止めないのなら斬るぞ！」

“もう放っておいてください！”

と二匹同時に言うてくる。

「それができないから止めると言ってるんだろ！」

‘もう家に入っていてください!’

とティオが叫ぶ。

くそ、こんなことのために俺は剣を使いたくない。

そのとき、ティオがかわしたレイジンの火の玉が先ほどいた中学2年くらいの少女に襲いかかる。

「っ！危ない！」

ティラは

助ける時間までは無かったので少女の前に立った。そしてまともに火の玉を喰らった。

「ぐあっ！」

「ああ！だ、大丈夫ですか!？」

「ああ、このくらい大丈夫だ。くそ、もう我慢ならない！」

ティラは持っている剣を鞘から抜いた。見るには極普通の剣だ。ティラは剣に力を送る。するとその剣は輝きだし形を変え、ティラの背丈ほどもある巨大な大剣になった。

「ここは危険だ。逃げる」

「あ、は、はい！」

そう言う少女は逃げて行き、やがて姿が見えなくなった。

ティラは二匹の龍を睨みつけると、空高く飛び上がり、二匹の龍のいる所まできた。

「な！？て、ティラ様！」

「天空の剣技、斬天激！」

ティラはそう言う二匹に手に持つ大剣で連激を喰らわせる。ドガン、ドガンと一撃が重い音になる。計8発の連激を与えた後、切り上げて後ろに宙返りし、その勢いに乗せて縦切りの構えにもってきた。そして叩きつけた。

ドカーン！

二匹の龍は凄まじい速さで地面に落ちて行き、地面に力一杯叩きつけられて共に気絶していた。

「ふう、つい本気を出しそうになった。本気を出していれば二人は確実に跡形も無く消えていただろうな」

ティラは地面に降りると大剣をもとに戻し、鞘に納めた。

「全く。二人が来てから俺の生活は非日常だ」

ティラは二匹を担ぎ、家に入った。

二人の寝床作らないと。傷治さないといけないな。ひとまず俺の部屋に置いとくか。

そう言うときティラ二匹を傷を治して部屋を後にし、夕食を食べ、さつさと風呂に入った。

ティラは湯船につかってぼんやり考えごとをしていた。

ああ、なんか大変だったな今日は。早く青の世界に戻りたい。

が、それは自分に力が戻らなければならない。

青の世界に戻るにはその力が必要となる。

その力で青の世界に繋がるブルーラインゲートという時空の歪をつくることができる。

赤の世界にはレッドラインゲートを通らなければならない。

青と赤の世界は元々ひとつだった。

ブレードルとよばれている世界で、青の世界と赤の世界に分かれているのだ。

その二つの世界の上に大きな争いが起こった。それがブレードル終末戦なのだ。それから何年か経った。現在は青と赤の世界は争いを止め、共存する道を選んで平和が訪れているらしい。この世界に龍が迷い込んで来ることはあつてはならないことだ。青の世界に戻り次第、直ぐにその原因を突き止めなければならない。さて、もう上がるか。

ティラは風呂から上がり、部屋へ向かった。部屋に入ると、敷いた布団の上で眠る二匹の龍に掛け布団を掛けてやるとベッドに潜り込み、直ぐに眠った。

青の世界に戻る日がまた一日、一日と迫りつつある・・・

## 翌朝

朝9時を時計が差している。連休中だからこの時間まで寝ていても特に問題は無い。

「朝・・・か。あれ、なんでティオがベッドの中に!？」

ティラは反対方向を向くと予想通りレイジンもいた。



「朝から何なんだ！」

ティラは二人り腕を組まれ、動けない状態になっていた。

「うーん。あ、おはようございます。ティラ様」

ティオがニコリと微笑む。

「あ、ああおはよう」

「おはようございます。お兄様」

「レイジンも起きたか」

二人ともなんか仲良くなってるないか？

「なあ、二人ともなんかあったか？」

「うふ、昨日ティラ様が寝た後私達仲直りしたんです。ね？レイジン」

「うん。そうだよ。ごめんなさいお兄様。勝手に喧嘩なんかしてしまつて。お仕置きでもなんでもしてください！」

「あの、私もすみませんでした。テイラ様の気持ちも知らずに・・・

」

「いや、俺の方こそ悪かった。俺にふさわしいのは二人共だ。契約した以上、俺が責任を持って二人の主を努める。だが、俺は二人を下僕扱いはいしない。絶対にな。だからこれからも宜しくな。二人屋へ向かった。部屋に入ると、敷いた布団の上で眠る二匹の龍に掛け布団を掛けてやるとベッドに潜り込み、直ぐに眠った。

青の世界に戻る日がまた一日、一日と迫りつつある・・・

## 第十九話 五連休一日目 剣を極めし友

ゴールデンウィーク一日目

計五日間の連休となっている。何をして過ごそうか迷う。剣の練習でもしておくか……

庭に出ようとすると、家のチャイムが鳴った。

「あ、ティラ様。私達は向こうの部屋にいるんで」

「ああ、すまない」

ティオも分かってきたようだ。

「はい……って、光羅木じゃないか」

「おはよう、ティラ。今日暇か？」

この少年は光羅木<sup>みづろぎ</sup> 隆司<sup>りゅうじ</sup> 同じクラスで剣道部に所属している。キリッとした目に俺より少し長めの黒髪。なかなかいい顔をしており、女子に人気もある。だが彼は取り乱すことのないしっかりした心を

持っている。つまり精神が強いということだ。だから剣道などにはぴったりの体をしているのだ。

「ああ、特に何もすることはないな」

「そうか。なら話は早い！突然で悪いと思うが手合わせ願いたい！」

「ああ、別に構わないが？」

隆司は剣道一直線で、前に俺と手合わせしたいと言ってきたのだ。何故俺なのかはわからないが。それで俺があつさと勝ってしまったのだ。三年の先輩も相当驚いていた様で、全国大会制覇できると言ってきた是非入部してほしいとのことだったが、俺は断った。何故なら俺はこの世界の住人ではないし。あまり人に知られたく無かったからだ。

「よし、じゃあ早速我が道場へ！」

「あ、待っててくれ、すぐ準備して来る」

「わかった」

テイラは家に戻るとティオ達のいる居間に行くと二人を呼んだ。

「俺、ちょっと出かけて来るから留守番二人で頼む」

「私達もお供しま・・・」

「駄目だ。帰ってきてから遊んでやるから、ちゃんと留守番していてくれ」

そう言うと二人は目を輝かせた。

「おまかせください！テイラ様！」

何か微妙によくハモるなこの二人・・・

「じゃあよろしく頼んだぞ」

「はい！」

「行つてらっしゃいませ！」

テイラは居間を出ると自分の部屋へ行き、念のため財布を持って玄関に向かい靴をはくと外へ出た。

「待たせた」

「よし、じゃあ行くか」

そうして俺達は光羅木の家でもある道場へ向かった。

「やった。テイラ様が遊んでくれるって」

「散歩に連れてってもらおうよ」

「あ、いいねそれ。じゃあ散歩にしようか」

「うん。楽しみだね」

「そうだね」

数分して俺と隆司は道場に着いた。

「さあテイラ。袴はかまに着替えてくれ」

「ん？防具じゃないのか？」

「防具だと何かと動きづらい。視界も悪くなるからな」

「それもそうだな」

そして二人は袴に着替えた。

「なかなか似合っているぞ。 ティラ」

「そうか？」

「ああ。 じゃあ空き地に行くぞ」

「道場でやるんじゃないのか？」

「ああ。 空き地の方がずっと広いから好きなだけ動き回れるからな」

「なるほどな」

俺達は道場から出て空き地に向かった。 すぐそこにあるので時間はかからない。

テイラ達は木刀片手に空き地へと走る。幸い誰にも見られずに空き地へと到着した。

「よし、じゃあ今から五分間準備の時間とする。準備体操するもよし、瞑想するもよし、素振りするのもよしだ」

「わかった」

こちらの世界来て以来、モンスターとは全く戦闘経験がない。一応剣で素振りして腕の衰えを防いでいるが。こういうのもいいかもしれない。

テイラは軽く準備体操して素振りをする。

あまりやり過ぎるといけないな。瞑想するか。

・・・

精神を研ぎ澄ませば、相手の技が良く見切れるようになる。だから瞑想しただけでも変化は大きいのだ。個人差はあるが・・・

「・・・よし、俺の方は準備万端だ」



「そうか。少し早いが始めるとしよう」

「ああ。先攻はそっちからでいいぞ」

「わかった」

隆司はそう言うとき空地の真ん中に線を引いた。二人はその線から五メートル程度離れた所に立ち、お互い向き合い木刀を構える。隆司は腰を落として木刀を両手で持ち前に出して構える。標準的な構えだ

テイラは普通に立ち片手で木刀を構えもせず持っている。

「では行くぞ、テイラ」

ざわざわ

「なんかギャラリーが来たみたいだな」

空地の入口には人だかりができていた。

いつの間に・・・気が付かなかったな。

ギャラリーから声が聞こえて来る。

「ねえ、あの人って中学のとき全国大会にでてベスト5の記録を残した光羅木 隆司じゃない？」

「え！？そうなの？じゃああの人は誰？」

「さあ、私見たことないよ。あの光羅木 隆司と戦ったから、よっぽどの腕なんだろうねえ」

同じ学校ではないと思われる同い年くらいの子生徒たちの声が聞こえてきた。

「ま、まあとにかく始めよう。」

「ああ、そうだな。来い。お前がどのくらい腕を上げたか見せてみる！」

「そのつもりだ！行くぞ！いざ、尋常に・・・勝負！」

隆司は木刀を構え、テイラに向かって突っ込んだ。二人の距離は一気に縮まった。

「あれから長い時間をかけて編み出した必殺技。疾風の剣を受けてみる！」

隆司はそう叫ぶと木刀を横に構えた。すると彼は凄まじい速さでテイラに斬り掛った。

が、テイラは首を傾けてそれをかわした。

「な、何！？俺の必殺技がかわされただ！？ くっ、でやあ！」

隆司はすぐに体勢を立て直し、思いきり木刀を振るった。

ガキッ！

テイラは片手の木刀で受け止めた。

「す、すごいあの人！あんな速いわざを避けてるよ。私は全然見

えなかったな。しかも片手で受け止めてるよ」

「全国大会余裕で優勝できるかもよ!？」

女子生徒達に続いて他の人のざわめきも聞こえてくる。ざわざわしていて何を言っているのかわからない。

「隆司。攻撃が当たらないからと焦るな。焦ると精神が崩れるぞ」

「そ、そうだな。俺はまだそこが修行不足なのかもしれないな。なすすべを失っても集中する・・・か。さすがだな。ティラ」

「いや、お前は強くなったぞ。まさか疾風の剣を覚えるとはな。普通のプロだと5年以上は確実にかかる。だがお前は一年程度で身に付けた。これは凄いことだぞ。」

「ティラはどのくらいのかかったんだ？」

「二、三日だ。初歩的な技だからな。」

「すごいな・・・やはりティラは剣の達人と呼ばれてもいいほどの腕があるな。いや、この場合剣の超人だな」

「そうか?じゃあ見せてやる。これが俺の疾風の剣だ」

テイラはそう言うつと逆宙返りをしてして距離をあけ、そして木刀を逆手に持ち、構えた。次の瞬間テイラの姿が消えた。

ヒュン！ガキイ！

風を切る様な音と共に隆司の木刀が一瞬にして折れ、空を舞って地面に突き刺さった。

「なっ！？」

隆司が振り向くと先ほど消えたテイラがいた。

「今消えなかったか！？」

「肉眼では捕えることの不可能な速さで相手の隙に一気に潜り込んで斬った。この技は使えば使う程強力になる。無論斬る速度も上がる。どんどん使ってこの技を極めてみる。頼りになる技だぞ」

「ほほう、なるほどな。わかった。そうする。色々と教えられたな」

「礼を言われる程でもないぞ」

「しかし、テイラはどこでそんな腕をつけた？そこでどんな修行をしていたんだ？」

「ここでは到底無理のある修行だ。お前程の実力があれば切り抜けると思うぞ」

「それはどんな修行なんだ？教えてくれ！」

「それはできない。外には漏らすことのできないことなんだ。すまない」

「そうか・・・残念だ」

隆司はテイラの肩を掴んで揺さぶったが、テイラの答えを聞くと残念そうに肩を落としてため息をついた

俺はモンスターとの戦いを繰り返しながら腕を磨いてきたからな。いつの間にか強くなっていた。もちろん俺も最初は素人で構えすらできていなかったし、鞘に剣を納めるのもなかなか上手くできなくて大変だった。

モンスターとの戦闘を繰り返して旅をしていたのだが、気がつくとも強くなっていた。自分が強くなるにつ連れてモンスターの方も強力になってたりしたから、あまり実感は無かった。

「よし、もう一度やるぞ。予備にもう一本木刀を持ってきていたから、それを使おう」

「ああ、今度は技無しの戦いだ。ちゃんとした真剣勝負にしたいからな」

「そうだな。ありがとうテイラ。お前のおかげでここまで強くなれた。そして俺はもっと強くなってみせる！」

「ああ、頑張るんだぞ。努力は必ず実る。流した汗は決して嘘をつかない。さあ、かかって来るんだ」

テイラは木刀を構えた。隆司も木刀を取り、構える。

「行くぞテイラ！やあ！」

ガキンッ

ティラは振り下ろされた木刀を防ぐ。隆司は攻撃を止めずに縦、横、斜めと連続して斬って来る。

ブンツ、ブンツと木刀が空を斬る音が聞こえてくる。ティラは隆司の攻撃を全てかわしている。体を反らせたりするだけで無駄な動きは特にしていない。

「くっ、全く当たらない。ちゃんと狙っているのに」

木刀を振りながら隆司は言った。

「それだけでは駄目だ。集中しろ」

「集中するだと？俺は十分集中してる。そうしないと真剣勝負にならないだろ！」

隆司はティラはの後ろに一瞬で回り込み、木刀を振り下ろす。が、ティラは振り向きもせずに受け止めた。

「これも駄目か・・・」



「もっと集中しろ。お前は十分は速さで振っている。人の目も追いつきにくい程だ。が、まだ俺からしてまだまだ遅い」テイラは振り向き様に木刀を横に降った。隆司は防ごうとしたが、その前にテイラの木刀が隆司の脇腹を捉えた。

「ぐう、速すぎて見切れない・・・！」

「一旦攻撃を止めて瞑想したらどうだ？手は出さない」

「だが今は戦闘中だ。そのようなことは・・・」

「俺の攻撃を見切りたいのだろう？」

「そ、それはそうだが」

「別にこの戦いは命を賭けたものじゃないのだから、そのくらい構わない。命に危険があるわけでもないだろう？」

テイラの言葉に隆司は迷った顔したが納得したのか、木刀を鞘に納めた。

「わかった。少しの間瞑想させてもらう」

隆司はそう言つと地面に座り、木刀を置いて瞑想を始めた。

その間テイラの家では

「ねえねえティオ。テイラ様の部屋のベッドの下にこんなものがあったよ」

「なにになに？・・・ってこれ、剣じゃない！勝手に扱ったりしたら駄目だよ！怒られちゃうよ？」

「うん。でも長いねえこの剣。こんな剣をテイラ様は使ってるのかな？」

その剣はとても長く、刀身だけで150cmはあると思われた。

「ほんと長い剣だね。私達の背丈ぐらいあるよ。」

この場合剣ではなく太刀である。太刀とは言え、刀身は曲がってお

らず、真っ直ぐである。しかも刀ではなく、西洋風の剣を元に作られているようだ。簡単に言えば、刀身のとても長い剣だ。太刀とは言い難い。

「とにかく、テイラ様のお部屋に返しておいでよ。壊したりしたら大変だよ?」

「一回剣を抜いてみたいな」

「そのくらい、いいんじゃないかな?」

「じゃあ抜いてみるね。それ!」

レイジンが勢いよく剣を抜いた。

ジャキーン と鞘から抜かれた剣が音を響かせた。銀色に輝く刀身に紋章のようなものが刻まれていた。

「うーん。重いよおこの剣」

レイジンは頑張って剣を持ち上げるが、すぐにガシャリと下ろしてしまった。

「ねえ、ここ見て」

ティオは剣の柄の上を指差した。そこには龍の顔の形に作られている部分があった。

「龍の顔だ。なんかこの剣は特別な感じがするね」

「うん。龍の目光ってるよ。ちょっと気味悪いかも・・・」

「早くしまっちゃおうよ!」

「うん、そうだね。部屋に置いてくるよ」

ティオはティラの部屋に剣を戻しに行った。

空き地では・・・

「よし、瞑想は終了だ。始めよう」

「わかった」

それから俺と隆司は決闘を続けたが、俺の勝利となった。俺自信、隆司はとても上達したと思っている。

「ああ、やっぱりお前にはかなわないな」

「いや、お前はすごく上達した。喜んでいいんだぞ？」

「テイラはそう言うが、俺はまだまだ修行が足りない・・・強くないと。お前みたいになさ」

「そこまで強くなくていい。俺はもう強くなりすぎた・・・のかも」

まだ力が必要なら、その分修行するが・・・

「そうか。まあ、今日はここまでで終了としよう」

「ああ、そうしよう。」

気がつけば時刻は四時を回っていた。

早く帰らないと。テイオ達との約束があるからな・・・

「それじゃ俺はもう帰るから」

道場に戻り、私服に着替えた俺はすぐに帰ろうと急いでいた。

「ああ、わかった。今日はありがとな。いろいろと勉強になった」

「それはよかった。じゃあ急いでるからまたな」

「じゃあな」

それから俺は大急ぎで家に帰った。

「ただい・・・」

「テイラ様ー！！！」

「お兄様ー！！！！」

「うわっ、ちょ、二人同時に来るな！」

ただいまのまを言おうとしていたティラだったが、二人に遮られ、飛び付かれた。そして倒れた。

「ティラ様！私達お散歩に行きたいです！」

「いてて・・・ん？散歩か。ああ、別に構わないぞ？」

「じゃあ早速行きましょうお兄様！」

「ああ」

ティラは二人を退かし、倒れた体をよいしょと起こして立ち上がった。

ティラはレイジンの服を見てふと思った。

レイジン、服持ってたのか？いや、これはティオのかもしれない。まあ、あまり気にすることでもないな。さっさと散歩行くか・・・

散歩に出かけた俺達は今、河川敷にある細い一本道を歩いている。道はとても長く、海まで続いている。川の流れに沿って行けば、そのうち海に出る。所々に橋があるので、ある程度行ったら反対側に同じ様にある道を歩いて帰るつもりである。

「おい二人とも・・・そんなに引つ付くな。歩きにくいだろ」

俺の家から少し離れた所にこの河川敷があるのだが、そう距離は無いので、たまに散歩に来たりする。

この二人と来たら家を出て今に至るまでにずっと俺に引つ付いていたのだ。

いわば、両手に華状態・・・どうりで周りの視線が痛かった訳だ。家は高層ビルが立ち並ぶ大都会から少しだけ離れたところにある住宅街にある。住宅街とはいえ、その外はビルだらけだ。俺はマンションとかより普通の住宅で生活したかったから、この大都会にある数少ない住宅街に住むことができたのだから、それだけでも十分感謝している。

「で、でも」。私はティラ様に引つ付いていたんです」

「ティオ。お兄様は私達のご主人様なんだから、ワガママはいけな  
いよ。私も引つ付いていたいけど、お兄様がそう言うなら従います」



「そうね。レイジンの言う通りだね。ごめんなさいテイラ様。私のワガママで迷惑をかけてしまいました・・・」

「え、あ、いや迷惑とかそこまでないから別に何ともないから・・・」

大げさだな、ティオは・・・それに、俺はこの二人の主という自覚がない。こういう関係にはあまり興味はない。だから俺は二人を決して下僕扱いしない。

ティオは暫く引っ付いていたがようやく離れた。

ティオが申し訳なさそうに頭を下げた。

俺はティオの頭を撫でてやった。

「うにゅっ」

とティオは変な声を出して気持ちよさそうに目を閉じた。

ね、猫じゃあるまいし・・・

俺は二人の主だと思ったことはない。なんと言つべきか、身分の差とかいうのはあまり興味はない。だから俺は二人を下僕扱いには決してしない。

「あ！いいな～ティオ。私も撫でてもらいたいな～」

ふとレイジンと目があつた。

うわっ、何でそんなに上目使いなんだ。ひよっとして撫でてもらいたいのか・・・？

「・・・・・・・・」

じ～

「・・・・・・・・」

じ～

「・・・・・・・・」

じ～～！

くっ！なんだよ全く。そんなに撫でてもらいたいのか？しかも最後のじくがほとんど睨みつけてただろ・・・前にもなかったか？こういうの。ああ、あれはテリオだったな。

俺は無言でレイジンの頭に手を置き、撫でてやった。するとレイジンは満面の笑みを浮かべた。そんなにいいものなのか？

暫く二人を撫でた後、また歩き始めた。

何でこんなことをやっていたんだ俺は・・・

川の方へ目をやった。よどむことなく流れつづける。この川はあまり汚れない川で、魚とかも見掛けることも少くない。だから釣りに来る人をよく見掛ける。実は俺も達弘と何回か釣りに来たことがある。今日は一人も釣りに来てはいなかった。

「テイラ様、何をぼんやりしているのですか？」

「ああ、いや、川に映る夕日が綺麗だなと思って」

「そうですね」

川に目をやったティオもじっと見続けた。

ティラは左側に見える川とは逆の右側を見た。そこには馴染んだ風景があった。少し先に自分の家のある住宅街が見え、そのずつと先の方に沢山の高層ビルがそびえ立っているのが見えた。

ここから見る夜景はとても綺麗だ。この二人にも見せてやりたいなま、そのうちだな。

ん？なんか雲ってきてないか？そういえば今日は夕方から雨が降るとか天気予報で言ってたような気がする。気が付くと夕日はこの日の終わりを告げるように遥か遠くの山に吸い込まれた。それを待っていたかのように夕日の沈んだ山の向こうからどす黒い雲がこちらに向かって流れてきている。あまりもたまたしているとまずいだろう。

「二人共、そろそろ帰るぞ。雨が降りそうだ」

「そうですね。もうちょっと散歩したかったですけど仕方ないですね」

「じゃあ早く帰りましょう。私お腹空きました」

「そうだな。俺も腹がへってきた」

そして俺達は急いで家へ帰った。玄関のドアを開けた瞬間一気に降り出した。

「なんとか濡れずに済んだようだ」

「ふう、危なかった」

レイジンがほっとため息をついた

「さて、夕食食べるか」

それから俺達は夕食を食べて暫くして風呂に入ろうと脱衣場に行く  
とティオとレイジンが一緒に入ると言ってきたのでつまみ出した。  
風呂から上がると二人ともがっかりしていたが何を思ったのか、俺  
の元ひ駆け寄って来るなり言い出した。

「風呂は駄目だったから、寝るのは一緒ですよ」

最近疲れやすい原因はこの二人にあるのかもしれない・・・

## 第二十話 五連休二日目 突如現れた巨大なザコ敵1（前書き）

すみません・・・受験が迫ってきてるので小説書いたりしてる場合じゃなくなってしまうって次話を出すのがいい加減になってしまいました。1月下旬に受験があって結果が出るので、次の話が出されるのはその後になる予定です・・・ホントこんな中途半端になってすみません。受験もこの小説も一生懸命がんばりますのでこれからもよろしくおねがいします。

テイオ「がんばってくださいねー縄雄様！」

縄雄「お、おいおい・・・俺はお前たちの主じゃないんだぞ？」

テイオ「いいえ、この話は縄雄様によって作られているのですから、縄雄様が第一です」

縄雄「そ、そうか・・・わかった」

レイジン「しばらく私たち出れませんねー」

縄雄「すまん・・・俺も必死なんだよー」

テイラ「俺って受験経験ある設定になってるのか？」

縄雄「ん？ああ、そうだ。そうなってるぞ」

テイラ「大変だったな・・・受験は」

縄雄（早速応用しやがった・・・）

ティラ「どうした縄雄？」

縄雄「いや、なんもないよ」

ティオ「受験つてそんなに大変なんですね」

レイジン「私たちはそんなのありませんでしたから」

縄雄（な、なんかム力つく・・・）

ティオ「まあ、がんばってくださいね」

レイジン「受験なくてよかったね」ティオ！

ティオ「うん！そうだね！」

縄雄＆ティラ「お前らに受験の苦しさなんてわからないだろう！」

ティオ＆レイジン「ひええ、ごめんなさーい！」

ティラ「待てー！」

縄雄「全く・・・あ、取り乱してしまいましたね（ヤバイ！前書き長くなりすぎた！）・・・では21話。どうぞー。（にしてもティラがあんなに取り乱すなんて珍しいな）」

第二十話 五連休二日目 突如現れた巨大なザコ敵1

ああ、もう寝よう。

部屋へと向かおうとしたのだが、二人に引き止められた。

「一緒に寝たいです〜〜」

「・・・散歩連れてってやったのだからそれで十分だろう？」

二人は同時に首をブンブンと振って否定した表情を見せてきた。

「なぜそこまでして俺と寝たがる？なんか訳があるのか？俺が好きなんて理由なのか？」

すると二人は困った顔をした。

こんなことを言ったのはまずかったか。

「あの・・・私、その、好きって言うのがよくわかりません」



「私もです。食べ物が好きと言うのはわかるんですけど・・・お兄様が好きと言うのはよくわかりません」

レイジンもティオに続いた。

何が言いたいのか初めはよくわからなかったが、だんだんわかってきた。

つまり、この二人にはまだ恋愛感情が芽生えていないのだ。まだほんの少しも・・・だから俺のことが好きなのかと聞いても理解できなかったのだ。この二人は相当な天然と思われるもおかしくはないだろう。俺としてはあまりにも突然に聞いてしまったから、二人は混乱してしまったのかと一瞬思ったが、安心した。

「まあ、この好きと言う意味は自然とわかってくるから気にするな」

今はこう言っておこう。では、何故そんなにまでして俺と寝たがるのか？ただなんとなくなのか、二人揃ってよほど寂しがりなのか・・・聞いた方が早いな。

「なあ、二人は何故そこまでして俺と寝たがるんだ？」

「ん、えつとですね。どうしてか、ティラ様と一緒に寝てると一

番落ち着くんです。何故かはわかりませんが・・・私、一人で寝ているととっても寂しいんです。だからテイラ様と寝たいんです」

俺と寝ていると落ち着くだと？じゃあさっきのは的外れな勝手な想像に過ぎなかったのか？だが引つ掛かるな。

一人で寂しいというのはつまり、孤独を表している。

もしかすると向こうの世界にいたときはずっと孤独だったのだろうか？そうだとすれば、そのときの寂しさが心に刻まれていて、今も一人になると寂しくなってしまうということになるのかもしれない。二人には向こうの世界にいたときの記憶は無いと言っている。これでは聞いても意味がない。とにかく、寂しかったのだろう。誰かといると落ち着くと言うのは、俺は親代わりみたいなものなのか？

「そうか。まあ、今日くらいいいだろう。だが、あまり引つ付くなよ？」

今日で最後にしたいところだ。今度からは自分たちの部屋で眠ってもらう。そうなれば俺はいつも通りに寝ることができる。

「ありがとうございますー！」

「さすがお兄様！」

「大げさだな・・・」

俺のベッドは元々二人用だが、俺がいつも一人で全部占領して寝ている。二人分の広さがあるから一人だと思いきり手足を伸ばして寝ることができる。この広さだから、ティオとレイジンが寝てもそれほど窮屈ではない。

「ティラ様のベッドはふかふかしてて広いから気持ちいいです!」

確かにふかふかしている。何故かこのベッドのバネは異常に強力なやつなのだ。だからこのベッドで跳ねると結構飛び上がる。たまにそれで宙返りとかしている。

「さあ、二人ともベッドに入るんだ」

「あれ?お兄様は入らないのですか?」

「俺はやることがある。先に寝てろ」

「やるつて、何するんですか?」

ベッドに入りながらティオが聞いてきた。

「宿題と武器の手入れと整理だ。最近あまり扱ってない武器とかあるからな」

「そんなこと明日にした方がいいですよ」

「だがレイジン。今何時だと思う？まだ九時半を過ぎたばかりだ。寝るには早すぎる」

そう言いつとテイラは屈みこんでベッドの下に手を入れようとした。が、ベッドの下の暗闇に不気味な赤い光が二つあった。

なんだ、これは？

テイラは手を伸ばしてそれを取った。それはレイジンが持ち出してきた剣だった。赤く光っているのは龍の顔の形をした部分の目だった。

「！？何故目が光っているんだ？今までこんなことは無かった・・・」

「あ、あのお兄様」

レイジンが困った表情でテイラを見た。

「ん？何だ？」

「あの、その剣私抜いたんですけど・・・すみません。す、すぐ部屋にしまいました。ちゃんと入れ物に入れて・・・」

入れ物とは鞘のことか・・・

「この剣はレイジンが扱った後に光り始めたのか？」

「はい、恐らく・・・」

「実はな、この剣は今まで全く鞘から抜けなかったんだ。どんなに引っ張っても、何人掛りで引っ張っても抜けなかったんだ。封印が掛っている様だった。当然、この目も光ってなかった。それがレイジンがいくら引っ張っても抜けはしなかった剣を易々と鞘から抜いた。ということはこの剣はお前達に何か関係があるのかもしれないな。」

テイラが試しに剣を引っ張ると、あっさり剣は抜けた。

「どうやら龍人のレイジンが抜いたことによつてこの剣の封印は解けたみたいだな。この剣については、いろいろと調べ甲斐があるな。また明日にするか。今日は隆司と戦ったし、たまには早めに寝るの

も悪く無いか。」

「やった！早く寝ましょうテイラ様！」

「う、うわ、そう急くなって」

テイラは二人にベッドに引っ張り込まれた。

テイラは二人に引っ付くなど言っていたからちゃんと二人は言うことを聞いてくれた。おかげでなんとか眠りに就くことができた。

## 五連休二日目

鳥のさえずりで目が覚めた。

「う・・・ん、結構眠ったな」

時計を見ると八時を回っていた。昨日の夜は十時前に寝たからかなり眠ったことになる。

十時間は眠ったな。なんか体があまりだるくない・・・たくさん眠ったからだろう。疲れも取れてるし、すぐに起きる気になれた。

ん？ティオとレイジン居ないな。もう先に起きたのだろうか？

リビングに行ったが二人の姿は見当たらなかった。

何処へ行ったんだ？ん？これは・・・

テーブルの上に書き置きらしきものがあった。

それにはこう記されていた。

「テイラ様、私とレイジンは買い物に出かけました。突然にすみません。昼頃には帰って来るのでご心配なく。      ティオ・レイジンより」

買い物・・・か。何か欲しい物でもあるのか？何か不安だな。まあ、あんまり俺が引っ付いて回るのもあれだろう。あの二人にはあの二人なりの楽しみがあるのだろう。さて、朝食とって武器の手入れをするか。

テイラは朝食を食べた後、武器の手入れのため、自分の部屋へ向かった。

「この家に置いてある全部の武器を手入れしないとな」

テイラが引つ張り出した武器は、まずベッドの下にある龍の剣と、タンスの一番下に服で隠してあった一本の刀。鍵を掛けた戸棚にリボルヴァーブレイド「マグナムと長剣が合体した銃剣とも呼べる、斬撃と銃撃を行える優れた武器。

斬撃と同時に発砲すれば大きなダメージを与えることができるどうかで見たことあるような武器」とその弾薬2000発。弾薬は普通のマグナムと同じやつなので入手しやすい。日本では到底無理。とショットガン一丁とその弾薬500発。と天井裏に大剣一本。がある。これで全部だが、これはこちらの世界に来る時持って来たものだ。こんなに持つてくる必要はなかったのではないかとここの所最近思うようになった。

リボルヴァーブレイドやショットガンはまだ一発も打っていない。龍の剣も大剣もまだ使ってない。唯一刀だけが素振りとかに使われているぐらいである。

「ひとまず剣系の武器は磨いでおこう」



ティラは机の引き出しから砥石をいくつか取り出すと、あぐらをかいてその上に大剣を置き、磨き始めた。

大剣は刀身が大きいからな。

磨ぐのは少々面倒だから先に終わらせる。ところで何故俺がショットガンなんか持っているかと言うと、ややこしくなるが、エクシオンボードと同じく未来に行った時に旧型武器専門店に行くところ、相当安い価格で売ってあったのだ。リボルヴァーブレイドは向こうの世界の最先端技術で造られた武器だ。

それから全部の武器の手入れを終えると、武器を元の場所に戻した。ふと時計を見ると、そろそろ十時になりそうだった。

なんか暇だな・・・ティオ達がいなくなると急に静かになった。元々こうだった。気にすることじゃないだろう。そうだ、随分前から借りっぱなしの達弘のゲームでもするか。

ティラは二時間ゲームをして時間を潰した。

結構やったな。なんか意外と面白かったな。達弘の気持ちが少し変わった気がするな。

「もう十二時になるのか。ゲームとかをしてるとあっと言う間に過

ぎるんだな。時間というものは」

そろそろティオ達も帰って来るだろう。

ティラはティオ達の帰りを待っていたが、一時になっても二人がまだ帰ってこない。

‘お兄様――！！’

龍姿のレイジンが猛スピードで飛んできた。

な、なんで龍になってるんだ。

‘お兄様！大変です！’

レイジンが人に戻りながら言った。相当な慌て様だ。

「どうした？」

‘街に変な怪物が突然現れて人を襲ってます！’

「怪物だと？」

この世界に魔物なんているわけじゃないか・・・動物園から逃げ出したトラかライオンかなんかだろう？

「で、どんなやつなんだ？その怪物みたいなヤツとは」

「えーと、水色の大きなゼリーみたいなやつで、何本も触手が生えてて・・・」

「それ、思い切り魔物じゃないか！なぜこの世界に・・・まあそれは後だ！行くぞ」

レイジンと俺はそのゼリーの魔物の討伐に街へ向かった。

「うわー！なんだこいつ！？た、助けてくれー！」

街ではその魔物が体から何本も生えた触手を振り回し、無差別に人や車などに攻撃していた

「な！？本当に魔物だ・・・ありえない」

レイジンの言うとおり魔物はゼリー状だ。それになんと言っても・・・でか過ぎる７メートルくらいある。普通は人の子供程の大きさの

はずだ。この魔物とは馴染み深い。戦闘的な意味で。RPGゲームで言うと、初めて出てくるスライム状の魔物だ。考えていても仕方ない

。倒す・・・

「そっいえばティオがいないぞ。どこいったんだ？」

「ティオならほら、あそこです」

レイジンの指差した先に魔物、スライムの触手につかまっているティオの姿があった。どうやら気絶しているようだ。

「私はなんとか逃げたんですけど、ティオが逃げ遅れてしまつて・・・」

「ひとまずあいつを静めるその隙にティオを助けるぞ」

ティラは持つてきておいた大剣を構えた。するとこちらに気づいたスライムが体から一本の触手を生やし、振ってきた。

「危ない」

ティラはレイジンを抱えて跳び、触手をかわすと同時に斬激を与えた。

切れた触手はしばらく地面でのたうち回った後、溶けて液になり、その液は本体に向かって流れて行った。

「ややこしい相手になりそうだな。あいつは生半可な攻撃じゃ倒せ

ないな。普通の大きさだと簡単なんだが・・・むしろ自分から危害は加えないはずだ。普段はおとなしいからな」

「大きくなっちゃたから、凶暴のなったんじゃないんですか？」

「そう考えるのが妥当だろうな。ここにいろ。俺はやつを倒す」

「で、でも、危険じゃないですか！」

「あいつのことをよく知ってるのはきつと俺だけだと思う。だから俺がやらないと」

「わ、わかりました・・・待ってます私。きつと戻ってきてくださいね！」

「わかってる、安心しろ。死にはしない」

ティラはレイジンの頭をなでてやるとスライムの元へ向かった。

警察たちが必死にパトカーを盾にしてスライムに向かって発砲していた。が、スライムに開いた穴はすぐに塞がってしまい、全く聞いていない様子だった。

ティラは進み出ようとしたが警察官に引き止められた。

「き、君！ここは危険だぞ！早く逃げるんだ！ん？何だその大きな刃物は・・・銃刀法違反だぞ？」

「そんなこと言っている場合じゃありません。それに今の勢力では全く歯が立たないでしょう。多分、あいつはマシンガンもミサイルもあり聞かないでしょう。俺がこの剣で真っ二つに切り裂いて見せます」

「んん・・・そうか、真っ二つにか・・・」

よし、今だ。

ティラは隙を見て戦場へ入りこんだ

「ああ、き、君！待つんだ！」

ティラ聞かずにスライムに向かって走った。他の警官達がティラに気がついたのか、発砲がやむのがわかった。そして周りがざわめいた。

ティラに気がついた巨大スライムは何本もの触手を一斉に飛ばしてきた。

第二十一話 五連休二日目 突如現れた巨大なザコ敵2（前書き）

いやはや、受験終了しました。結果は見事合格でした。これで安心して小説書けます。いつテイラを青の世界に戻そうか迷ってます。そう遠くはないので、少し話がまとまったら戻すつもりです。では二十一話どうぞ。

## 第二十一話 五連休二日目 突如現れた巨大なザコ敵2

テイラに迫って来る何本もの触手。

テイラは飛んでかわした。触手はテイラの後ろにあつた車にあたり、車は爆発した。テイラは少し低めのビルの上に降りた。人間では考えられない程の跳躍力だ。

更に触手は周りから覆うようにして迫って来た。

逃げ場がない。

テイラは大剣を横に振った。

振った軌跡が赤い燃え盛る炎となり、飛んでいった。それは触手に当たると、斬ると同時に燃やした。ジュワリと言う蒸発したような音と共にテイラの周りにドサドサと何本ものちぎれた触手が落ちてきた。それはまたも液体になり、本体へ戻ろうとする。テイラは見逃しはしなかった。大剣に炎をともし、液体に振り付けて蒸発させる。

すると本体がピクリと動き、何本か触手を体にしまった。

ん？静まったか・・・？

テイラがそう思った瞬間本体から突然一本の触手が飛び出し、テイラに向かってきた。



ティラは切り落とそうと大剣を振りかぶった。

ガキン！

金属同士が激しくぶつかる音が響いた。

なっ！

触手は切れておらず、ティラの大剣と対等にぶつかっていた。

何本かの触手をまとめて丈夫なのを生み出したのか。刃の様な形をしているな。対斬激武器と言う訳か。

触手はそうだと言わんばかりに触手を振り払い、大剣もろともティラを吹き飛ばした。

ドカン！

「っ！」

ティラは後ろにあったさっきいたビルより高めのビルの壁に叩きつけられた。体がめり込んだ。が、体は重力に負け、下に落ちてしま

う。下にいる人達のざわめき声や悲鳴が聞こえる。真逆さまだつた体を立て直して地面に着地した。すると驚いたような声が周りから上がった。

「君、大丈夫か!？」

すぐ近くにいた若い警官が声を掛けて来た

「はい、大丈夫です」

俺にとっては全然軽い傷だ。壁に叩きつけられたくらいなんともない。

「足、折れてないのか」

「はい」

警官の人は驚いたような顔をしたが、もとの表情に戻るとまた話掛けてきた。

「そ、そうか。それよりどうにかなりそうか?あいつ」

そう言つて巨大スライムを指差す。

「大丈夫。必ず倒します。」

その時、爆音が響いた。空には何機もの戦闘機や戦闘ヘリがスライムに向かって飛んで行く。道路には沢山の戦車で埋め尽された。

「おお、これはこれは。自衛隊のおでましか？」

周りから歓声や拍手が沸き上がった。

そして一斉射撃が始まった。空からはミサイルの雨、地上からは砲弾の嵐。凄まじい爆発音が街中に響き渡った。

段々と煙が晴れていく。

「やったか！？」

「なっ！テリオ！」

テイラはただじっと見つめていた。

まだ煙はかなり立ち込めている。突然一本の触手が煙の中から飛び出し、空の戦闘機や戦闘ヘリを叩き飛ばしたり、落とした。周りから悲鳴が上がる。

「なに！？あんなにやったのにまだいきているのか？」

いや、あいつの場合特別だ。他の魔物なら跡形もない。もちろん。強力なやつでもだ。

「俺が行く」

そういうとティラは警官の呼び止めに振り向きもせず走った。

ティオ。無事でいてくれ。

ティラは煙の中に飛込んだ。そこには無傷のスライムがいた。

全く効いてない……ん？これは……

よく見るとスライムの少し前に半透明の膜のようなものがスライムの体を覆うようにして貼ってあった。

バリアーか。こんな上級技を使いこなすとは。なかなかだな。だが、俺には通用しないな

ティラは一閃すると、張られていたバリアーはいとも簡単に砕けた。そして一気に距離を積める。その動きがあまりにも速かったのか、スライムは少し出遅れた。迎え撃とうとしたが、既にティラはティオを捕まえていた触手を切り落として救出していた。

「これで決める」

ティラは大剣を真っ直ぐに構える。大剣を赤い炎が包んだ。それと同時に大剣から眩い光が放たれた。ティラはティオを空高く放り投げた。そしてスライムにそのまま突っ込み切り上げた。スライムは空高く跳ね上げられた。ティラも追う様にして飛んだ。そしてスライムに炎をともした大剣が振るわれた。

「斬天激！」

連続してスライムに斬激が与えられる。以前ティオ達にやった時と全然違っていた。一撃一撃に凄まじい轟音が鳴り響き、切っているのではなく、叩き切っているようだった。みるみるスライムの体が崩れていき、少しずつ小さくなっていった。

計17発の斬激を与えた後、高速で逆宙返りしながら2発斬激を与え、もう一度回って大剣を縦切りの構えに持つて行く。そして最後の一撃に力を溜める。大剣が眩く光り、収まる。そして炎の一撃が与えられた。

ドガァァン!!

凄まじい爆発音と共にスライムは思いきり地面に叩きつけられた。

道路には巨大なクレーターが出来ていた。ティラは地面に着地すると同時に大剣を背中につけ、丁度良く降って来たティオを受け止めた

「目立ち過ぎた・・・一旦引くか」

ティラはエクシオンボードを呼び出すと、人目に着かない様に煙の中を飛び、レイジンの待っている所へと急いだ。

「あ！お兄様っ！ティオも無事だったんですね！」

「ああ、今は急がなければ・・・乗れ、行くぞ」

「はい！」

そして俺達は家に戻った。しばらくして警察が来て署まで来て欲しいと言われ、逆らう訳には行かないから行くことにした。

## 回想

「それで、テイラ君だったかな？ 今回の騒動についてだが・・・」

「はい」

俺は一人の刑事の人と机を挟んで向かい合って座っていた。

「あのようなものが今まで出て来たことは無かった。つまり、未確認生命体だ。しかも狂暴だ。君はそんなやつを倒した。いとも簡単そうにな。ひょっとして君は何か関係があるんじゃないか？」

有るにはあるが・・・言うべきか？

少し迷ったが言うことにした。

「信じられないかもしれませんが、やつは見れば分かるようにこの世界のものではありません」

「ふむ、だが見てしまったからには、そう信じるしかあるまい」

「信じる、とは言いません。ただ、今はこれだけしか・・・」

「ああ、無理に言うことはない。ありがとう」

刑事の人は優しく微笑んでくれた。安心した。いい人だ。

「それでその時君は大きな刃物を使っていたな？」

「大剣ですか」

「まあ、その大剣とやらの所持には特殊な免許がいるのだが・・・」

「すみません。免許はありません。銃刀法違反ですよ・・・」

「ああ、いやその事なんだが、君は特別その法律には掛らない事になったんだよ。審議だね。全議員が認めてね、即決だったよ」

「それでは・・・」



「ああ。君には全く積みはない。ただし、その武器で脅迫等はまた別の罪に問われるからな。これはまたあのようなのが現れたときのためなのだからな」

「はい。わかっています」

「よし、言うことはそれだけだ。さあ、家に送ろう」

「ありがとうございます」

「いやいや、呼び出したのはこちらの方だ。むしろこっちが礼を言うべきだ。ありがとう」

「いえ、当然の事をしたまでです」

回想終了

と、こんな流れで俺は家に帰してもらった。その後ティオの意識が戻り、特に怪我をした様子も無く、安心した。早く戻らなければならぬ。青の世界へ。

慌ただしい日が幕を閉じた・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8177d/>

---

ドラゴンレジェンド

2010年10月16日14時40分発行